

海外平安文学 研究

ジャーナル 2.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.2.0



伊藤鉄也 編

<謝辞 Acknowledgement >

本研究は JSPS 科研費 25244012 の助成を受けたものです。

This was financed with JSPS KAKENHI Grant Number 25244012.



あいさつ

昨秋平成 26 年 11 月に創刊した『海外平安文学研究ジャーナル』（オンライン版、ISSN：2188-8035）は、異分野の方々にも温かく迎えていただきました。そして今、その第 2 号ができましたのでお届けします。

今号は、昨秋カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学で実施した「国際研究交流集会—日本古典文学の可能性と異文化との交響—」の報告を、特集として巻頭に据えました。

英訳された『枕草子』『源氏物語』『蜻蛉日記』に関する 3 本の論稿と、1 本の新出資料紹介で構成しました。また、「研究の最前線」では、韓国語訳とスペイン語訳の『源氏物語』に関する研究成果を収載しました。

本課題では、国際的な視野で日本文学および日本文化を見つめることを意識して、さまざまな問題に取り組んでいます。多角的な視点で平安文学を論じた、みなさまからの意欲的な投稿を歓迎します。

これまでに、多くの方々のご理解とご協力をいただきました。改めて、お礼申し上げます。

そして、これからも変わらぬご支援のほどを、どうかよろしく願いいたします。

2015 年 3 月 11 日

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)

「海外における源氏物語を中心とした平安文学

及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」

研究代表者

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立大学法人総合研究大学院大学

国文学研究資料館 伊藤鉄也

■ 『海外平安文学研究ジャーナル』 原稿執筆要項 ■

本ジャーナルの原稿を募ります。平安文学に関する論稿等をお寄せください。

- 1 論文分量 400字原稿用紙換算で30枚以上（12,000字以上）
小研究（20枚以下）、研究余滴（10枚以下）、翻訳実践（自由）
- 2 原稿表記 原則として日本語表記・横書き
- 3 原稿締切 随時（応募希望者は、〈氏名・所属・仮題・簡単な原稿内容・パソコンのメールアドレス〉等を明記して、あらかじめ執筆意向を【itokaken@gmail.com】まで連絡のこと）
- 4 電子公開 毎年春・秋（予定）
- 5 体裁 A5版の版面を想定したオンライン画面
- 6 推奨版面 ・活字11ポイント、27行×34字詰、余白上下左右20ミリ
・フォントは、MS明朝、Times New Roman
・節ごとに小見出しを付す。
・注は版面ごとにそれぞれ下部にアンダーラインを引いて付す。
注番号は本文の当該箇所には丸括弧（ ）付きの数字で示す。
（参考文献の書式例については、「海外源氏情報」内「海外平安文学研究ジャーナル」(<http://genjiito.org/journals/>) 参照のこと）
- 7 原稿入稿 ワード文書またはテキストファイルをメールに添付して送付。
問い合わせ・送付先 【itokaken@gmail.com】
- 8 採否/校正 採否はメールで連絡。執筆者の校正は初校のみ。ただし、公開から1年以内に1度だけ改訂版に差し替え可能。
- 9 図版・写真など 掲載許可が必要な場合、原則として資料手配や使用料は執筆者の負担。図版・写真は、原稿枚数の中に含む。

目次

あいさつ	伊藤 鉄也	3
原稿執筆要項		4
☞ 特集「国際研究交流集会」(2014 カナダ)		
序文		9
国際研究交流集会プログラム		10
英訳された『枕草子』が作り出した大衆文化	Gergana Ivanova	11
小説として読まれた英訳源氏物語	緑川 眞知子	22
1955年のサイデステッカー訳蜻蛉日記について	川内 有子	37
カナダ国際研究交流集会レポート	海野 圭介	50
新出資料『蜻蛉日記新釈』(上・下)	伊藤 鉄也、浅川 槿子	54
☞ 研究の最前線		
『源氏物語』韓国語訳と李美淑注解『ゲンジモノガタリ1』	李美淑	63
スペイン語に訳された『源氏物語』の書誌について	浅川 槿子	69
執筆者一覧		83
編集後記		84
研究組織		85

つきに伊勢物語に正三位を
あはせてまたさためやらすこ
れも右はおもしろくにきは、しく
うらわたりよりうらはしめらかき
世の有りさまをかきたるはおかし
う見所まさる平内侍
伊勢の海のかき心をたとらすてふり
にしあと、浪や△つへき

*表紙・前扉・扉 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵
『源氏物語屏風』「絵合」巻の色紙
(金箔散下絵入の詞書、金泥彩色画／番号：ラ1-18)

特 集

2014 カナダ「国際研究交流集会」

- 日本古典文学の可能性と異文化との交響 -

*The Possibilities of Classical Japanese Literature
and Cross-Cultural Harmonies*



序 文

本特集は 2014 年 9 月 26 日にカナダ・バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学アジアセンターにおいて行われた国際研究集会での発表を元に構成しています。

国際研究集会は 2 つの科研が合同で開催しました。

午前の部では、伊藤鉄也を研究代表者とする基盤研究 (A)「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」(課題番号: 25244012) の研究集会を、午後の部では今西祐一郎を研究代表者とする基盤研究 (A)「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」(課題番号: 22242010) の研究集会を行いました。各々の部で日本側とカナダ・アメリカ側の研究者による研究発表とディスカッションを行い、いずれも有意義な議論を交わすことができました。

本ジャーナルには、午前の部に行われた伊藤科研に関わる発表を収録しています。

午後の部の発表に関しては、今西科研の「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究Ⅳ」(2014 年度未発行の報告書)をご参看いただければ幸いです(プログラムは次ページに掲載)。

ご発表いただいたシンシナティ大学のゲルガナ・イワノワ先生、研究集会開催の為に力添えをいただいたブリティッシュ・コロンビア大学のジョシュア・モストウ先生と大学関係者の皆様、そして会場をご提供下さったブリティッシュ・コロンビア大学には、この場を借りて御礼申し上げます。

■日時:2014年9月26日(金)10:00-17:00 / September 26, 2014

■会場:ブリティッシュ・コロンビア大学(UBC) Room 604, Asian Cent

(1) 午前の部:「翻訳からみた平安文学」“Heian Literature as Seen in Translation”

午前の部司会・伊藤鉄也

10:00 開会の挨拶

ジョシュア・モストウ (ブリティッシュ・コロンビア大学 教授)

10:05 伊藤鉄也 (国文学研究資料館 教授) による科研趣旨説明

10:10 「英訳された『枕草子』が作り出した大衆文化」“The Pillow Book in English Translation and Popular Culture” ゲルガナ・イワノワ (シンシナティ大学 准教授)

10:40 「小説として読まれた英訳源氏物語」“Reading Lady Murasaki's 'novel': the reception of Genji monogatari” 緑川真知子 (早稲田大学 非常勤講師)

11:30 「1955年のサイデンステッカー訳蜻蛉日記について」“Concerning the 1955 Seidensticker Translation of Kagerô nikki” 川内有子 (立命館大学 大学院博士後期課程1回生)

12:00 ディスカッション

(2) 午後の部:「漢字と仮名の表記情報学」“The Grammatology of Kanji and Kana”

午後の部司会・海野圭介

14:00 今西裕一郎 (国文学研究資料館 館長) による科研趣旨説明

14:10 「『万葉集』における書記の可能性」“Possibilities of Writing in the Man'yôshû” トークイル・ダシー (カリフォルニア大学ロスアンゼルス校 准教授)

14:40 「『伊勢物語の歌絵』を通して見た伊勢物語諸伝本の漢字表記法」“Chinese Character Usage in Texts of The Ise Stories as seen through Ise monogatari Poem-Pictures” 上野英子 (実践女子大学 教授)

15:30 「『蜻蛉日記』の表記情報一傍記が本行本文に混入すること」“The Grammatology of Kagerô nikki-Marginalia Incorporated into the Body of the Text” 伊藤鉄也 (国文学資料館 教授)

16:00 「漢字,かな,font:江戸時代の表記と書体」“Kanji, Kana, Font: Edo-Period Grammatology and Script” 海野圭介 (国文学資料館 准教授)

16:30 ディスカッション

17:00 閉会の挨拶 今西裕一郎 (国文学資料館 館長)

英訳された『枕草子』が作り出した大衆文化

ゲルガナ・イワノワ

日本で最も頻繁に見られる清少納言のイメージは、白楽天の詩から引用された香炉峰の雪のエピソードに基づいた、御簾を巻き上げている姿である。『枕草子』は『源氏物語』としばしば対比されるが、日本国外での『枕草子』像・清少納言像はどうであろうか。文学作品像とその作家像が国境を越えた時、どのように変わって行くのであろうか。本論文では、『枕草子』の英訳が海外での『枕草子』像・清少納言像の享受史にどのように影響してきたのかについて考えてみたい。

『枕草子』を初めて紹介した英文文献は、1899年に出版されたアストンの『日本文学史』である。『枕草子』は、1つの章において幾つかのエピソードをもって紹介され、清少納言は著名な随筆家、ジェームス・ボスウェル (James Boswell) に例えられている。周知の通り、その後『枕草子』は、アーサー・ウェイリー (Arthur Waley)、アイヴァン・モリス (Ivan Morris)、メレディス・マッキニー (Meredith McKinney) らによって英訳され、単行本として出版された。この3つの英訳の違いについては、津島知明氏と緑川眞知子氏がすでに取り上げているので、本稿では違う角度から検討することとしたい。

『源氏物語』や他の平安文学の作品の英訳は、早いもので100年近く前から出版されているのに、『枕草子』だけが数多くの脚色を付け加えられた。特に印象深いのは、1980年代から多くの詩集、映画、小説などの文芸作品に『枕草子』の英訳が影響を与えている点である。なぜ『枕草子』が英語圏の大衆作家たちに多大な影響を与えたのか。『枕草子』の英訳が英語圏における日本文学像、日本人像、日本像をどのように構築したのか。平安文学が外国語に翻訳されることによって何が得られ、何が失われるのか。アーサー・ウェイリーの英訳、ピーター・グリーンウェイ (Peter Greenaway) 監督の映画『ザ・ピロー・ブック (邦題『ピー

ター・グリーナウェイの枕草子』』(The Pillow Book, 1996年)、そして幾つかの『枕草子』にヒントを得た歴史小説に焦点を当てて、これらの間いを考えてみたい。

◆ウェイリーの英語訳

1928年、ウェイリーは『枕草子』を単行本として初めて英訳した。欧米ではジャポニズムの影響により、日本が美を愛する国として広く認識されていた頃のことである。ウェイリーが訳したタイトルの「セイショウナゴンのピローブック」は、後に出版された英訳本にも続けて使用され、また『枕草子』の日本国外での享受史にも影響を与えた。ウェイリーの最初の英訳本の冒頭では、日本とイギリスの文化と社会の比較がなされているが、これは10世紀の日本と1920年代のイギリスとの比較である。ウェイリーは日本を過去を忘れ去った、純粋に美的かつ文学的文明社会として描いている¹。また、イギリスでは教育を受けた全ての人はなんらかの形で歴史に興味を持っているが²、「10世紀の日本人にとって古いということは、かび臭く、野暮で不快なものだった」³と、そして日本は歴史的・知的背景を欠く国で、美学・芸術に特化した国だと述べている。ウェイリーは結果的に、イギリスを理性の国、10世紀の日本を情熱・感性の国と位置づけている。ウェイリーによると、一般的に平安時代に関する情報源は『源氏物語』と『枕草子』の2つしかなく、この2つのうち、特に『枕草子』が事実の記録に徹しているという点で⁴、フィクションである『源氏物語』より重要だと断言している。ウェイリー版は、1921年に出版された金子元臣の『枕草子評釈』の英訳で

1 Arthur Waley 『The Pillow Book of Sei Shōnagon』 (Tuttle Publishing, 2011年)、24頁

2 前出1 25頁

3 津島知明 『ウェイリーと読む枕草子』 (鼎書房、2002年、17頁)、前出1 25頁

4 前出3 22頁、前出1 31頁

ある⁵。金子のこの本は『枕草子』を最も多い章段に分割した、北村季吟の『春曙抄』に基づいている。ウェイリーはその章段のうち幾つかを選び出し、時系列ごとに並べ替えており、結果的に、ウェイリー版『枕草子』は、訳者の注釈を添えた清少納言の日記のようなものとなっている。ウェイリーは、「つまらない、理解できない、反復されているもの、引喩が多くて注釈が必要なもの」を省略した⁶と主張しているが、彼は数少ない章段を使い、特定の清少納言像を作り出している。このため、ウェイリーの翻訳は、『枕草子』を当時の英語圏の読者に面白く、わかりやすく、明確なものへと生まれ変わらせたと言える。

津島知明氏がウェイリーの英訳について幾つかの指摘をしている。その1つは、『枕草子』は一般論・普遍的な記述もあるのにもかかわらず、訳文では一人称を使うことによって清少納言の体験談という面を印象付けているという点である⁷。つまりウェイリー訳『枕草子』は、作者個人の経験のみに基づいた日記として造形されていると言ってよいであろう。『枕草子』を個人的な経験の記述の集積とみなすことによって、その作品の文学的価値を取り除き、清少納言が見た他人の様々な経験を凝縮し、実際に作者自身の経験へと転換しているのである。2点目は、ウェイリーが歴史的背景を取って書かないという『枕草子』の特徴について言及していないという指摘である⁸。ウェイリーはさらに、『枕草子』は回想・日記的な記述で構成された歴史的な記録であるとみなすにもかかわらず、歴史的事実と突き合わせることをしていないと言える。例えば、ウェイリーの注釈は藤原道隆の死、中宮定子の兄弟達の流罪などの「長徳の変」と呼ばれる政治事件について触れているものの、原本には、道長の時代の到来が晩年の定子に屈辱を味わわせたことについての明確な記述が含まれていない。ウェイリーはこの点を知ってか知らずか、まったく言及していないのである。つまり、『枕草子』で悲惨な現実を反映

5 金子元臣『枕草子評釈』（明治書院、1921年）

6 前出1 21頁

7 前出3 141-142頁

8 前出3 147-148頁

させず、全盛期の「明るさ」が定子が政治的な後ろ盾を失った時期にも継続することを、ウェイリーは額面どおりに受け取るわけである。こうしてウェイリーは、『枕草子』を背景を持つ文学作品とみなさず、その背景から切り離し、実際に書かれた文脈からのみ解釈しているのである。その結果、『枕草子』は信憑性が高く、個人的な体験談を書き留めた日記であるかのように紹介されている。このため、ウェイリー本は、訪ねたことがない日本の過去に魅せられたイギリス人の想像の産物としての「ピロー・ブック」になっているといえよう。

また、英訳には、清少納言と殿上人との交際関係についてのエピソードも数多く取り上げられている。清少納言の恋人として紹介される藤原齐信、清少納言と仲がいい元恋人として描かれている橘則光、清少納言の寝室を覗く友人藤原行成、さらに清少納言が宮廷を離れた時に訪ねてくる様々な男性、悪天候の夜を選んで久しぶりに訪ねてきた成信、暁に傘をささせて細殿を出て行った地下、地位の低い男性。さらに、理想の恋人の振る舞い、恋人と密会する季節の魅力などについての記述を含めることによって、ウェイリーは経験豊かな遊女のような清少納言像を構築している。原本が自然の描写、女性の教育と地位、美的情操などの幅広い話題を取り扱っているのに対し、ウェイリーの英訳はごくわずかの「類聚的章段」と「随想的章段」、そして男女関係を語る数多くの日記的章段の選択と並び替えによって、色好みの女性作家像を描き出している。

このようにウェイリーの英訳は不完全で恣意的で原本からかけ離れているにもかかわらず、再出版され続けている。アマゾンドットコムで検索してみると、ここ4年の間ウェイリーの英訳が Kessinger Publishing, LLC (2010年)、Tuttle Publishing (2011年)、Literary Licensing, LLC (2013年) によって刊行されているのが分かる。ウェイリーの英訳に問題があることを知らない読者にとって、この英訳が信頼できるものになってしまい、そういった読者の日本人への理解が間違った形で作られるわけである。

◆ピーター・グリーンナウェイ監督の映画『ザ・ピロー・ブック』

こうしたウェイリー訳『枕草子』の読者の1人が、世界で人気を集めた映画監督のピーター・グリーンナウェイである。彼自身がインタビューで「初めて清少納言と枕草子に出会ったのは、ウェイリーの英訳だった」と述べている⁹。1990年代に世界中で注目されたグリーンナウェイの映画『ザ・ピロー・ブック』は、ウェイリーの英訳が作り出した日本と日本の女性のエキゾチックなイメージに、さらに独特なイメージをつけ加えた。この作品では、主人公の女性ナギコが子供時代に住んでいた日本と、大人になってから移り住んだ香港との25年分の回想場面と現実とが交互に登場し、それと同時に現実のナギコと清少納言の類似性も紹介される。ナギコは20世紀後半に日本で育った、日本人と中国人のハーフである。彼女は、小さい頃から書道と文学に触れつつ育ったという設定である。ナギコの父は毎年彼女の誕生日に、彼女の顔に名前を筆で書き、彼女の叔母はナギコが寝る前にいつも『枕草子』を読んで聞かせる。その上彼女は、父が自分が書いた作品を出版してもらうため、同性愛者の出版業者に性的サービスをしているのを襖の奥から見ていた。大人になったナギコは、文学と性交とが関連があるということを理解する。さらに『枕草子』には約300章段あるにもかかわらず、そのうちナギコがいつも聞かせられていた殆どは、書く悦びと性の悦びの繋がり、あるいは男女関係についての章段であった。1つの例として、グリーンナウェイ自身が創作した章段16が挙げられる。その冒頭の言葉が、「恋人が二つ目の夜に訪れた時～」であり、続いて平安時代のような密室での恋人同士の映像が流れ、あたかも『枕草子』から引用しているかのような印象を観る者に与える。ナギコが18歳で離婚し香港に移住するとき、読み聞かせをしてくれた叔母はナギコに『枕草子』だけを持たせる。

香港でナギコは、理想的な恋人としての父の面影がある書道家を探す。そのため彼女は大勢のアジア人男性に自らの体文字を書いてもらった

9 Nick James. "Body Talk." Sight and Sound Vol. 6, no. 11 (1996:14)

うえて性交渉を持つが、最終的に理想のイギリス人の恋人を見つける。彼は英語の翻訳家で、ナギコの父を犯していたあの出版業者の男の愛人となり、さらに自分の体にナギコ作品を書くよう彼女に勧める。ナギコはそれまで大勢のアジア人男性の体に作品を書いて出版社に持ち込んだが断られており、白人の新しい恋人の体に作品を書いて前述の出版業者に持ち込むと、「紙」が優れているとの評価で出版されることが決まる。この映画において、ナギコは現代の清少納言であるかのように描かれている。というのも、まず彼女の名は、一説に清少納言の名であったという「ナギコ」で、彼女の父は、実際の清少納言の父と同姓同名でかつ同じ文学者の清原元輔という人物とされている。また、そして、漢文が読めたであろう清少納言に対し、ナギコは中国人の母を持ち中国語が話せる、即ち漢文を使えるということになっている。加えて、ナギコが英語、日本語、中国語の3ヶ国語をあやつる才女であるというのも、平安時代に漢文を読めるエリートだった清少納言を意識しているようでもある。グリーナウェイはインタビューで、「結婚の概念がなかった、男女関係が大らかだった時代」¹⁰に魅せられ、清少納言は大昔に生きた色好みの女性作家で、『枕草子』も清少納言の恋人のことを書き留めた日記だということを、映画で表現したと言及している。こうした清少納言像が、ナギコにとって理想の女性となっている。映画の一場面では、画面の右半分に崩し字の文章を示すことで『枕草子』を引用しているかのように見せ、左半分にはナギコの人生において特に性的な場面が映し出される。さらにグリーナウェイは、『枕草子』がエロチックな作品だというイメージをウェイリーよりも強く打ち出している。彼はウェイリーの英訳から男女関係にまつわる章段を抜粋し、自身も『枕草子』からの引用だという章段を創作し、それらにおいて清少納言が数多くの男性と関係を持つ性欲が強い女性だと強調している。その他にも、以下に2点挙げるように、文学と性交との繋がりについて述べた章段もある。

10 前出9

「肉体と文学の悦び、私はこの二つを十分味わう幸せに恵まれました。」¹¹

「紙の匂いは、雨の庭から突然訪れる新しい、恋人の肌の香りのよう。墨は油で整えた髪の毛の匂いが致します。そして筆は。そう、筆は悦びの道具。その用途には疑いありませんが、その意外な効果を人はいつも忘れていてるようでございます。」¹²

このような、「色好みで才能のある遊女のような女性」という清少納言のイメージは、ナギコにとって非常に魅力的なものとして描かれている。彼女は「清少納言のように、日記を私のすべての恋人で埋めたい」¹³と言う。その次に、ナギコが全裸で様々な男性と一緒にいるシーンが沢山出てくる。彼女の体には、さまざまな男性が性行為と引き換えに文字を書いていく。これらの男性は、まるで売春婦が会おう客のように、年齢も、国籍も、職業もまちまちである。このように、ナギコは淫乱な女性として描かれている。

グリーンナウェイはウェイリーの英訳から「書くことが存在していなかったら、私たちはどんなにか憂うつな気分苛まれることでしょう」という文章を引用している¹⁴。このように、グリーンナウェイの描いた清少納言は歴史的・社会的背景から切り離され、日本の淫乱な精神を内在している女性で、映画はこのような女性があたかも現代の日本にも存在するかのよう印象を与える。清少納言をモデルにした現代の主人公を使うことによって、日本の女性の過剰な性欲が10世紀から今でも続くものだと強調しているといえよう。そしてさらに、『枕草子』は清少納言とナギコを繋ぐ重要なアイテムとして登場している。前述のように、ナギコは幼い頃から叔母に『枕草子』を読み聞かされ、香港へ渡る時にも叔母から『枕草子』を持たされた。こうして、『枕草子』は家庭の中

11 ピーター・グリーンナウェイ『ザ・ピロー・ブック』(Lions Gate Films, 1996年)

12 前出 11

13 前出 11

14 前出 1

の年配の女性から若い女性に受け継がれる、女性にとって特別で重要な知識が含まれている本として扱われている。結果としてこの映画において、清少納言から現代のナギコに至る日本の女性は、1000年以上変わることなく、時代に取り残された進歩のない存在として描かれている。そしてこの描写の信憑性を高めるため、清少納言つまり実際に生きていた人物が使われているのである。さらにグリーンナウェイは、映画の中で『枕草子』からの引用と思わせたい時は画面に写本のようなものと章段の番号を見せ、ポップアップ画面のように平安の女性が物を書く映像を登場させる。その上で、日本の女性の声で文章が読み上げられ、その読み上げ文の英語訳が字幕で表示される。この映画のほとんどの視聴者が読めない崩し字で書いてある写本も、信憑性を高めるために使われている。このようにグリーンナウェイの映画では、清少納言の数多くの恋人と性的描写の作品、現代の女性にも影響を与える作品としての『枕草子』のイメージを構築している。こうして本作品において『枕草子』は、肉体と文学の悦びが昔も今も変わらず日本の女性に不可欠なものであることを印象づけるのである。

◆『枕草子』の大衆化

グリーンナウェイの映画は欧米で大きな注目を集めた。「ピロー・ブック」という言葉がタイトルに含まれる小説、詩集は、映画が封切られる以前の1980年から1994年までの間にいくつか出版されていたが、それらは『枕草子』が随筆だという点のみに着目して書かれたことが窺われる¹⁵。これらの作品の主人公は欧米人で、設定が日本国外になっており、清少納言の『枕草子』への言及は全く感じられない。しかし、映画

15 Judith Copithorne 『Miss Tree's Pillow Book』(1971年)、Barry Gifford 『Landscape with Traveler: The Pillow Book of Francis Reeves』(1980年)、Carol Tinker 『The Pillow Book of Carol Tinker』(1980年)、Rosellen Brown 『Cora Fry's Pillow Book』(1994年)

が封切られた後の2000年から2009年までに出版された3作品は、すべて設定が過去の日本で、主人公は淫乱な女性であり、性交渉の記述もある。これらの小説の簡単な概要は下記の通りである。

まずは『レイディー・カサのピロー・ブック』（笠の郎女の枕草子）である。語り手兼作家のカサは、8世紀に生きていた歌人ということになっている。随想的な章段と日記的な章段からなるこの作品は、カサと大伴家持との恋愛関係に焦点を当てており、年下の女房との一夜だけの恋愛関係も描かれている。カサの情熱的な和歌が、恋に身を焦がす主人公の心情を表現している¹⁶。

次の『レイディー・ウィスティアのピロー・ブック』（太夫藤の枕草子）は、江戸、元禄時代に設定されている。太夫藤は吉原で働く女性で次期将軍の噂のある松平ミツヨシの殺人事件の犯人だと疑われている。この小説では、彼女が毎日書いていた日記『ピロー・ブック』から、恋人との逢瀬を詳細に書いた2章分の記載内容をそのまま載せている。日本文学を知らない読者のために、この小説はピロー・ブックを、「ピロー・ブックとは、宮廷に勤めていた女房たちと同じように、女性が自分の考えと自分の人生にあった出来事を記す日記」と定義している¹⁷。つまり、「ピロー・ブック」は作者を中心にした個人的な日記とされて、『枕草子』も同様に、男性との性的な関係を描くものだと思わせている。

最後の小説は、源平合戦の時代に設定されている『フラワー侍のピローブック』という作品である。貧しい集落で働いていた主人公の遊女は、遊郭へ売られた経験、様々な男性からの暴力、別の遊女と女性同士の恋と忍び逢い、客と過ごした夜の数々、平ミチヨリと一夜を共にしたのち身請けされ、正妻になったことなどを、自分の「ピロー・ブック」につづっている¹⁸。

16 Barrie Sherwood 『The Pillow Book of Lady Kasa』、New Writers (Dc Books, 2000)

17 Laura Jo Rowland 『The Pillow Book of Lady Wisteria』 (St. Martin's Paperbacks, 2002)、17頁

18 Barbara Lazar 『The Pillow Book of the Flower Samurai: Love, Sacrifice and

これらの3つの小説の主人公はみな様々な時代に生きた女性で、いずれの作品においてもピロー・ブックは男女関係を記録している。このように『枕草子』の英訳である「ピロー・ブック」は欧米の読者にとって、女房あるいは遊女の人生を語る日記、性的内容を含む記録のような日記として定義付けられている。そして、これらの歴史小説はタイトルに「ピロー・ブック」という単語を含ませることによって、清少納言の『枕草子』を連想させ、いにしえの日本を物語る文学作品の系譜の中に自らを位置づけている。

◆ 結 論

本論文では、『枕草子』が日本国外で大衆化された経緯を紹介してみた。『枕草子』がエロチックな作品であることを思わせる時代遅れの英訳が、グリーンウェイによる映画の、さらに歴史小説のモチーフとなったという事は明らかである。これらの従属的な作品は、日本が欧米で知られている芸者・侍・美術などの様々な象徴を寄せ集め、ごたませな状態で形象化している。そこでは、完全にオリエンタリズム的な日本人像が描かれ、平安時代の文学作品は、肉体的な悦びにだけ焦点を当てたものとして構築されている。

このような日本国外での『枕草子』の享受は、江戸時代に普及された『枕草子』の脚色に非常に似ている。日本で17世紀から19世紀の間に出版された数多くの平安文学のパロディと脚色では、平安時代の作家たちは江戸時代の遊女の起源であるかのように、平安文学がエロチックな内容だけであるかのように扱われている。江戸時代における清少納言像と『枕草子』の脚色は、当時の性愛文化の影響を受けているが、なぜ欧米の作品にはオリエンタリズム的な特徴を示すのであろうか。理由は様々な考えられるであろうが、その1つとして、グリーンウェイの映画に見られるように、欧米の製作者は間違った情報に基づいて過去の日本の

イメージを作り、それがあたかも現代まで継続しているかのように発信し続けていることがあげられよう。

英語圏の大衆文化の作品が日本の差別的なイメージを作っているのは確かであるが、その一方で、一般読者の関心を日本に引き付ける役割も演じていると考えることもできる。これらの読み易く理解しやすい作品を入り口に、日本への興味を深め、大学の授業、日本への訪問などの次なる行動によって、日本に対する固定観念を捨て、じかに日本に触れる機会を作り出すことが出来るであろう。また、江戸時代の平安文学のパロディ・脚色を前例として、欧米における平安文学の享受の理解をより深めることにもつながるのではなからうか。

付記

日本語訳に際しまして、平山美樹子先生及び竹内正行氏に多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

(シンシナティ大学准教授)

小説として読まれた英訳源氏物語

緑川 真知子
(みどりかわ まちこ)

はじめに

アーサー・ウェイリー (Arthur Waley) 訳の源氏物語初版表紙のほぼ中央に「この物語は 11 世紀の日本の宮中に仕えた女性 (宮中女房) の作品です。現存する優れた長編小説のひとつだということが、一読直ぐさまわかると思います」という惹き句がある。原文は、This tale is the work of a Japanese Court lady of the eleventh century. It is believed that it will at once be recognised as one of the greatest long novels in existence である¹。「物語」と訳した語は、英語では tale であるが、その直ぐ後には「長編小説のひとつ」と novel の単語も使われている。ウェイリー訳源氏物語が出たころは、いわゆる小説と邦訳される novel の概念が、おおよそのところ現代において認識される novel の概念としてかたまりつつあった時代である。「物語」の訳語については後述する。「小説」として認識される作品において、必ず意識されたのは「作者」である。紫式部の石山寺執筆伝説は有名であるが、明治時代という早い時期にはじめて源氏物語を英語にした末松謙澄は、見返しに紫式部石山寺執筆の図を挟んでいることからわかるように、この時代作者は大きな存在であった²。

現在まで源氏物語の英訳は 1 巻だけの英訳などを除外するなら、主たる英訳は 5 種類ほどある³。本稿においては、源氏物語外国語訳として

1 アーサー・ウェイリー Arthur Waley, *The Tale of Genji* by Lady Murasaki, vol. 1. (London: George Allen & Unwin, 1925).

2 末松謙澄 Suyematz Kenchio (ママ), *Genji Monogatari: The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances*. London: Trübner, 1882.

3 前出 1、2 でもウェイリー訳、末松訳をあげてあるが、今日手に入れやすい廉価版の情報を含めた源氏物語の主な英訳は次のとおりである：①末松謙澄 Suyematz Kenchio (ママ), *Genji Monogatari: The Most Celebrated of the*

大きな影響を及ぼしたウェイリー訳について注目してみたい。そして1920年から30年代にかけてウェイリー訳が描き出した源氏物語の世界が、どのように「小説」として読まれたか、ということを検証してみたい。ただし、「小説」や「物語」の定義を文学史的位相で厳しく捉えていくことに大きな目的があるのではないので、ごく一般的な理解、つまり、小説にはまず作者が存在し、その作者が創り上げた話の筋を読者は追っていく、そして登場人物の心理の描写に一喜一憂し、時には読者自身の姿を登場人物に投影して、その世界に入り込んだりするというような、だれでも思い描く範囲においての「小説」や「物語」というゆるやかな理解にとどめるし、英訳の姿をみるにあたって、ある意味このようなゆるやかな認識にそれなりの意味があると思われる。

◆1 ウェイリー訳源氏物語と世界文学

ウェイリー訳源氏物語は、周知のように「鈴虫」巻全巻が翻訳されていないなどの問題を抱えてはいるが、影響力などの側面から一応最初の全訳を成したと見なして良いであろう。当該英訳がなければ、世界における源氏物語の評価というものも違っていたかも知れないとまで言える。ウェイリー訳第1巻目が出版された1925年、これは大きなインパクトを英国の文学界に与えた。ウェイリー訳の初版本、第1巻目の表紙をかざった惹き句については、*tale*（物語）、*novel*（小説）の語につい

Classical Japanese Romances. London: Trübner, 1882. Reprint: *The Tale of Genji*, translated by Suematsu Kenchō. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1974. ②アーサー・ウェイリー Arthur Waley, *The Tale of Genji* by Lady Murasaki, 6 vols. (London: George Allen & Unwin, 1925–1933. Reprint available from Charles E. Tuttle. ③エドワード・サイデンスティッカー Edward G. Seidensticker, *The Tale of Genji*, 2 vols. New York: Alfred A. Knopf, 1976. Reprint available from Charles E. Tuttle. ④ヘレン・マッカラ Helen C. McCullough, *Genji & Heike: Selections from The Tale of Genji and The Tale of the Heike*. Stanford: Stanford University Press, 1994. ⑤ロイヤル・タイラー Royall Tyler, *The Tale of Genji*, 2 vols. New York: Viking, 2001. Paperback reprint in a single volume, Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 2003. Abridged edition: *The Tale of Genji*. Penguin Books, 2006.

ですで見ましたが、この惹き句が「現存する優れた長編小説のひとつ」と謳ったとおり、今日では源氏物語は、日本と言う国の文学の最高傑作という枠組を越えて、「現存する優れた」世界文学「のひとつ」として認識されている。つまり源氏物語は、アーサー・ウェイリーの英訳によって、正に世界文学の地位を確保したといえる。

「世界文学」という概念は最近よく取り沙汰されるようになったともいえるが、もともとはドイツの文豪ゲーテが言い出した言葉である。ゲーテはエッカーマンとの対話においてこの言葉を口にする⁴。自身の作品がヨーロッパの様々な言語に翻訳されて拡がっていくさまを体験して、強い感銘を受け「世界文学」という概念に行き当たるわけである。そしてゲーテは世界文学を支える根本にあるのが、翻訳であるとはっきりと認識していた。少しだけ寄り道して「世界文学」とは何かという定義について極簡単にみてみたい。

『世界文学とは何か』という本を著した比較文学者であるディヴィッド・ダムロッシュ (David Damrosch) 氏が、世界文学を定義している。氏は当該書のなかで様々な言葉を用いて「世界文学」を定義しているが、以下のように言っている部分をまず引いておく⁵。

発祥文化を越えて流通する文学作品すべてを包含する。(中略) 実りある生を送りうるのは、(中略) 発祥文化を越えた別の文学大系においてアクティブに存在するときにかぎられる。(『世界文学とは何か』 pp. 15-16)

個人的にこの定義に全面的に賛成するわけではないが、概ねこういう方向で世界文学というものを捉えていくという姿勢は首肯できる。氏はタイラー訳源氏物語にも触れている。そこでは氏は基本的に専門家と一般

4 ヨハン・ペーター・エッカーマン (Johann Peter Eckermann) 著、山下肇訳『ゲーテとの対話』上・中・下、岩波文庫、1968、1969

5 ディヴィッド・ダムロッシュ (David Damrosch) 著、秋草俊一郎他訳『世界文学とは何か』、図書刊行会、2011

読者（いわゆる「世界文学」の読者）の2種類の受容者を認めていることになる。専門家の読みは「日本文学の領域に理解の枠を移していくアプローチ」（『世界文学とは何か』p. 454）であるが、「世界文学」として読むときは「祖国文化から根本的に切り離して訳しなおし、より広範な新しいコンテクストに入れることになる（中略）専門家が起点文化にできるだけ入っていきこうとするのに対し、世界文学の徒は外側に立って、お気に入りの樹木を茂らせた森に向き合う。まさにベンヤミンが翻訳は原語の外に立つと書いているように」（『世界文学とは何か』p. 454）とし、自身の定義の最後として「『世界文学とは、正典のテキスト一式ではなく、1つの読みのモード、すなわち、自分がいまいる場所と時間を越えた世界に、一定の距離をとりつつ対峙するという方法である』。（中略）多様な個人がいて、それぞれが独自に作品を選びめぐり、正典と非正典の作品を混ぜ合わせあざやかなマイクロカノン小正典を作り出す。（中略）テキストそのものは共存すれば自立もする」（『世界文学とは何か』p. 455）と続ける。氏の議論は社会に存在する文学作品とその理解というものと同時に、個人の読みの心理や状況そして状態に重きがおかれている。確かに実際に作品を読むというのはすぐれて個人的な営為である。

少し話が拡大してしまっただが、ともあれ、文学作品が発祥文化を越えて流通するには、翻訳が欠かせない。当たり前のことであるが、源氏物語が日本の文化を越えて世界の人々に読まれるためには外国語に翻訳されなければならなかった。文学という言葉を使う芸術においてその言葉を別な体系の言葉に置き換えてしまうという、致命的欠陥とも思える作業である翻訳が、世界文学という概念においてとてつもなく重要な役割を果たしていることは確実である。もし、明治時代の末松澄彦の翻訳しか存在しなかったら、その評価はどうなっていたであろうか。

◆2 明治時代の源氏物語評価

ここで、少し明治時代の源氏物語の評価について極簡単に浚ってみる。明治のお雇い外国人バジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall

Chamberlain) は『日本事物誌』(1890) という著書で良く知られているが、チェンバレンはその生涯を通して『日本事物誌』の改訂を重ね続けたと言っても過言ではないのである⁶。『日本事物誌』は第6版までであり、それ以前、第5版以前とでは、源氏物語についての記述が180度転換しているのである。第5版以前の版において、源氏物語を「退屈」だとかき下ろしているのであるが、最終版の第6版においては、「源氏物語のみが最高峰に立っている」(高梨訳『日本事物誌』p. 41) としている⁷。第6版はチェンバレンの死後の1939年に出版されている。ちなみに、邦訳は源氏物語が「最高峰」であるとの評価を受けた最終版である第6版の翻訳である。末松訳は1892年に出ている。チェンバレンは末松訳に目を通した可能性は非常に高いと言えよう。第6版の改訂に当たって、チェンバレンの源氏物語評価を180度転換させたのは、年代的なことを勘案すると、ウェイリー訳源氏物語の出現にあったと考えてよいようである。源氏物語の新しい英訳者であるタイラー(Royall Tyler)氏は翻訳を終えた後、大きな感慨と共に「西洋では、この物語を(原典で)読んでいる人はいない。誰も読んでいない」という少し極端で強い意見を述べていたが、明治の時代にもこの物語を原典で終わりまで読んだ欧米人は意外に少なかったと言ってよさそうである。末松訳は、かなり古い時代の日本において散文の文学作品と呼べるものが存在したことを示すことは出来た。が、多くの読者にその文学的価値や香りまで十分に伝えることが出来た英訳ではなかった。またウェイリー訳が成功を収めたのは、時代的な背景も影響している。

ウェイリー訳が受け入れられていった当時のイギリス文学界において

6 バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)著、高梨健吉訳『日本事物誌』東洋文庫、1969。原典は、*Things Japanese*、初版は1890、最終版(第6版、すなわち邦訳された版)は1939。詳しくは、拙論「『退屈』な小説が『現存する偉大な小説の一つ』になるまで」、伊井春樹編『日本文学研究ジャーナル第3号』所収、2009を参照のこと。

7 原文は“The Genji Monogatari stands alone on a pinnacle.” (*Things Japanese*, 6th ed., p. 319).

は、19世紀後半から強くなっていたジャポニズムの影響を受けて、芸術全般のモダニズムの波がヨーロッパに押し寄せていた。モダニズムというのは、言葉通りの近代主義というものであるが、古い伝統を破るというイメージがあり、いわゆる、ヨーロッパにおける芸術全般に関して、パラダイムの変換が湧き起こっていた。そのような動きの中であって、非ヨーロッパ的な東洋の片端の文学がウェイリーという語学の天才の力を得て、注目を浴びることとなったわけである。そして何よりもウェイリー訳源氏物語が『世界文学』としての地歩を固めることの力強い手助けとなったのが、書評であった。しかもモダニズム文学の旗手でもあり、当時イギリス文壇の売れっ子でもあったヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) が、『英国ヴォーグ』という時代をリードする雑誌に、ウェイリー訳第1巻が出版されるやいなや、その書評を載せたのである⁸。書評の詳細を見ていくことはしないが、素晴らしい文体でウルフは、イギリス人の祖先は紫式部が筆を持って優雅な世界を創作していた頃は、戦いに明け暮れ、節くれ立った手で食べ物をむさぼる野蛮な輩だった、などとはじめている。英国を揶揄しながら平安の日本と比較しており、内容的にも非常に面白い。文壇の寵児ウルフの書評はウェイリー訳の価値を決定づけ、源氏物語は「世界文学」としての歩をすすめることになったのである。もちろん、歩み始めたのは紛れもなく「英語の小説」として訳され、「英語の小説」として読まれることとなった源氏物語であった。

◆3 ノヴェル (Novel)

今日では、表題に掲げた「小説」は英語では普通は novel であり、みたようにウェイリー訳の表紙の惹き句にも、「長編小説の1つ」と

8 ウルフ書評 (英国ヴォーグ 1925年7月号) 邦訳は阿部知二訳「源氏物語を読んで」『婦人公論』、1952. 1. pp. 118-121) 参考: 川本静子訳『病むことについて』みすず書房、2002年。なお書評について詳しいことは拙稿「ヴァージニア・ウルフによるウェイリー訳『源氏物語』書評をめぐって」(『源氏物語英訳についての研究』に収録、武蔵野書院、2010年、pp. 87-105)を参照のこと。

という言葉が使われていた。しかし、日本においてもある程度言えることであるが、流通のあり方なども含め「小説」というジャンルや形態やその概念はかなり新しいものである。おそらく英国では18世紀から19世紀後半にかけて醸成され、成熟した概念だと言えよう。19世紀には、作者が創作した物語世界や形態を指す言葉としては *novel* 以外の *romance* という単語などが併用された。明治時代末松謙澄が源氏物語を翻訳した時、書名を *Genji Monogatari* とローマ字で「字訳」し、副題を付けている。その副題は *The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances* とされている。つまり、日本古典「ロマンス」の最高傑作、となっている。今末松が *Romances* とした単語を敢えて訳さずに「ロマンス」とカタカナ書きにしてみたが、これを源氏物語の英訳として相応しい日本語に置き換えるなら「物語」となろうが、もちろんこの単語は「小説」とも翻訳できる。末松が源氏物語を英訳した時代、*novel* という語はあまり普及していた単語ではなく、作者が創作した虚構の作品という概念に当てはまる語としても認識されていなかったということをも示してもいいよう。

そして周知の通り、ウェイリーは源氏物語という書名を英訳するのに、*novel* という単語ではなく、*tale* という単語を使用している。ニュアンスとしてはお伽噺 *fairy tale* というようなイメージを包含している単語である。これはひとつには、所謂 *novel*、小説というジャンルより、ずっと古い時代の物だという印象を与えたかたのではないかと思われる。現在では「物語」の訳語として *tale* を使うことは、ほぼ定着してきている。早くに「物語」の訳語として *tale* を使ったのは、『日本文学史』を表したアストン (William George Aston) である⁹。アストンは源氏物語の書名を *The Tale of Genji* としており、ウェイリーはこれに倣ったと考えられる。

9 ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston) 著、川村ハツエ訳『日本文学史』、七月堂、1985。 *A History of Japanese Literature*, Kelly and Walsh, 1899。ペーパーバック版、Rutland VT and Tokyo: Charles E. Tuttle, 1972。

◆4 ノヴェリスト・ムラサキ

novel ではなく、tale と英訳された源氏物語であるが、既述したように第1巻目はウルフの書評を得て大成功を収め、翌年引き続きウェイリー訳第2巻目が出版される。注目を浴びている *The Tale of Genji* の第2巻目なので、書評も直ぐに出ている。この第2巻目の書評を少し詳しく見ていきたい。というのも、これを見ることによって、英語圏の読者いかにウェイリー訳源氏物語を、いわゆる小説として読んだのかということがわかるのではないかと思われるからである。

第2巻目書評は、イギリスで最も権威ある書評誌の最高峰 *Times Literary Supplement* (TLS『タイムズ文芸付録』1902年創刊) に掲載された¹⁰。基本無記名であるが、古いものは誰が書いたのか明らかにされていて、ウェイリー訳第2巻の書評は、リチャード・デニス・チャークス (Richard Denis Charques) というロシア専門家が書いていたことがわかっている。

次に、少しだけチャークスの書評から引用していくが、全般にチャークス書評は、日本人の自尊心をこれでもかたくすぐるような内容が並べ立てられてあり、ウェイリー訳源氏物語の何から何まで褒めちぎっている。こういうものを読むとあらためてウェイリー訳の偉大さを痛感し、ウェイリー訳が源氏物語に対して英訳を通して成した仕事の素晴らしさを再認識することとなる。

レイディ・ムラサキの作品は、11世紀初頭に書かれたものであるが、あきらかに虚構作品の傑作の一つです。The Lady Murasaki's work, written at the commencement of the eleventh century, is clearly one of the great pieces of fiction.

「レイディ・ムラサキ」としているのが面白い。初版の表紙の惹き句を

10 ウェイリー訳第2巻目書評、*The Times Literary Supplement* (London, England), Thursday, March 18, 1926; p. 206; Issue 1261

今一度思い出して頂きたいが、英国人にとっては、源氏物語が傑作であるということは何度も何度も確認されなければならないことであった。ここでは fiction フィクション（虚構作品）という言葉が使われている。続けて、ウェイリーが第2巻目に付した序文に触れている。

ウェイリー氏は、その啓蒙的かつウィットに富む序文で、紫式部以前の日本における虚構作品と紫式部の小説家としての方法について触れています。Mr. Waley has added an introduction, which is both illuminating and witty, dealing with fiction in Japan before Murasaki and with her methods as a novelist.

またフィクションの語が出てきているばかりではなく、紫式部を小説家、ノヴェリスト novelist と呼んでいる。ウェイリー訳第2巻目序文では The Art of Murasaki (紫式部の芸術) との小題がついている部分である。ウェイリーはこの後に続く3巻目にも序文を載せるが、今一般に誰でもが手にすることのできるペーパーバック版で使われている序文は初版第3巻目に掲載されたものである。

The Art of Murasaki と題した序文においてウェイリーは、紫式部の心理描写の手法に書評家達が触れており、紫式部をマルセル・プルーストと同等の位置で語っている、と記述している。(One reviewer did indeed analyse the nature of Murasaki's achievement to the extent of classifying her as 'psychological' and in this respect he even went so far as to class her with Marcel Proust. —ウェイリー訳 vol. 2, Introduction, p. 30) ジェイムス・ジョイスと並んで20世紀最大の小説家と言って過言ではないプルーストと紫式部は良くその類似性によって比較されるが、心理描写という事実に着目するだけでも、当然と言えば当然ではある。ヨーロッパでウェイリー訳源氏物語が、昔々のお伽噺としてではなく、小説として読まれたということに疑いはない。詳しくウェイリー第2巻目の序文を見してみるべきであるが、今回は紙幅の関係もあり、そこまでふれることはしない。

◆5 小説的心理描写

ウェイリー訳初版第2巻には「賢木」の巻から「松風」までの英訳が収められている。書評家チャークスは賢木の巻の最初の数行からして紫式部の小説家としての質というものを味わわせると言及する。次に引用しておくが、「賢木」冒頭は他の多くの巻の冒頭と同じように登場人物の心の思いをおりませた文章ではじまっている。

齋宮の御くたりちかう成ゆくまゝに御息所ものこゝろほそくおもほす。やむことなくわつらはしきものにおほえたまへりし大殿の君もうせ給てのち、さりとともと世人もきこえあつかひ宮のうちにも心ときめきせしを、その、ちしもかきたえあさましき御もてなしをみ給に、まことにうしとおほす事こそありけめと、しりはて給ぬれば、よろつづのあはれをおほしすてゝ、ひたみちにいってたち給。(池田龜鑑編著『源氏物語大成』第二冊 333頁)

最初、齋宮の伊勢下向の日が近づくにつれて六条御息所も、そこはかたなく心細く思っているとあり、葵上逝去が言及され、葵亡きあと遂には六条の御息所が正室になるだろうという大方の期待を裏切り、光源氏の訪れが絶えてしまう、と語り手がはじめる。次の文章では六条の心の言葉に真っ直ぐに入り込んで、光源氏様は自分（六条御息所）にうんざりしてしまった何かを掴んでいるのだ、と確信したとあり、それならば、もうすべてを捨てて、(齋宮となった女とともに伊勢に行ってしまう)と、六条の心の思いが叙述されて、そしてひたすら出発の準備にとりかかった、と語り手が結ぶという文章である。語り手の言葉と登場人物の心の思いの言葉というのが限りなくグレーのゾーンにある文章である。語り手の介入の度合いがともすれば、非常に弱くなっている部分もある。このような冒頭文のあり方は、一挙に読者を物語の渦中に連れ込む強い効果があり、そういう語り手や登場人物の心情の翻訳をウェイリーが非

常に上手くこなしているのだと言えよう。チャークスは次のようなウェイリーが紫式部の文体を褒める言葉を書評の中に引用している。

ウェイリー氏はためらうことなく、紫式部の作品には「世界におけるどの長編小説にもない優れた表現の美がある」と言います。不思議なことに、これについてはウェイリー氏自身はかなり敏感になっているようですが、紫式部の文体には、何かヴァージニア・ウルフ女史のそれが彷彿とすることがあります。Mr. Waley says unhesitatingly that her work has “a beauty of diction unsurpassed by any long novel in the world.” Curiously enough, for the modern reader Murasaki’s style carries with it a suggestion—to which, it seems, Mr. Waley himself is sensitive—of that of Mrs. Virginia Woolf.

ウェイリー訳第1巻のめくるめくような書評を書いたウルフの小説の文体と比べられている点、大変興味がそそられる。同時代の著名な小説家ウルフの文体が翻訳者の文体に影響を与えているのか、それともモダニズムの旗手ウルフが新しい文体模索の中で東洋の文学を翻訳したウェイリーの文体に影響を受けたのか。どちらも真実なのではないか、と思うのである。おそらくこの影響関係は循環している類のものなのだろう。線条的な影響関係ではなく、時代磁場的な影響関係を考えるべきかと思われる。

次に書評の終わり近くでチャークスが引くウェイリー訳第2巻の終わり、つまり「松風」の終わりは、次のようになっている。まず、相当する原文を挙げておく。

ふみはひろごりながらあれど、女君みたまはぬやうなるを、
せめて見かくし給ふ御まじりこそわづらはしけれ、とてうち
み給へる御あいぎやうところせきまでこぼれぬべし。(池田龜
鑑編著『源氏物語大成』第二冊 598 頁)

[...] which he had handed to Murasaki was spread open before her; but she was not reading it. "I am sure you have been peeping," he said at last. "That way of reading letters is very tiring," and he smiled at her with such evident affection that the tears welled to her eyes. ["The Wind in the Pine-Trees," p. 358. 下線緑川]

「松風」の終わりは、周知のように、明石が母尼君と源氏との間に産まれた女の子を連れて京都大堰に暮らすこととなり、光源氏は嵯峨野の御堂の仏の飾りなどをせねばならないなど口実を設けて明石のもとに出掛けて行く。それとなく事情を察知している紫上の痛々しい心情が確かに美しい筆致で描かれている。遅くなってしまったが光源氏が紫上の機嫌を取ろうと宮中から戻って来ると、そこに明石から返事が届き、それを読んだまま光源氏は広げて置き、しまわずに「これを破ってお捨てにしてください」等と言う。紫上は見て見ぬ振りをするという、心理的にピリピリとした緊張を伴う夫婦間のやり取りが描かれている。この巻は、源氏が明石との間にできた女の子をこちらに引き取りたい旨を伝えるという終わりとなっている。

引用したウェイリー訳文の最後に傍線を施したが、紫上が涙を流したという一文は原文にはない。ウェイリーが付け加えている文章なのである。チャークスは次の様に書評を結ぶ。

ムラサキの名前が、全然違う（タイプの小説家といえる）プルーストとオースティンの名前と一緒に並べられるのは、少しも驚くに足りないのである。It is small wonder the Murasaki's name has been coupled with names as diverse as Proust and Jane Austen.

心理描写の妙手プルーストやオースティンの名を持ちだすまでもなく、書評においては、源氏物語の心理描写に大きな注目が集まっているということがわかるのである。ウェイリー訳が出た当時、英語圏の人々はこれを心理小説として読んだということである。源氏物語、5人の英

訳者には入れなかったが、「賢木」の巻だけを翻訳したオズワルド・ホワイト(Oswald White)という人物がいる。どのような人物か殆どわかっていないが、日本語がとにかく良く読めたと思われる。ウェイリー訳が出る前に「賢木」の巻だけを翻訳し、日英協会発行の雑誌に掲載している¹¹。ホワイトは源氏物語は大変難しい読み物であるとしながら、その一因が文章に主語がないことであり、また物語の男女関係がかなり複雑な様相を呈していて、これを読み始めた者はすぐさま、集中力が必要なことを感じるだろうと言う。更に、とくに人物像の一部は互いの心理描写において構築されると付け加える。シェイクスピアの『空騒ぎ』の男女の主人公ベネディック(男)とベアトリス(女)の場合と比べる¹²。源氏物語でも登場人物の男は恋する女の気持ちを、自分であれこれ想像して考えをめぐらし、女のほうもまたしかりで、物語はそのような心の思いの描写の連なりとして展開し、読者はそれぞれの登場人物について別な登場人物の心の中の思いによって知り、それらがまた心をかき乱すような要素となる。作者はこれらの登場人物の思いを読者の前に提示し、主語のないこれらの登場人物の心の思いを読む読者の側が誰の心の言葉なのか自分で上手く当てはめながら読んでいくのだ。初心者の読者は髪を搔きむしりたくなる、とホワイトは書く。確かに心理描写は源氏物語の文体の1つの大きな特徴である。ジャポニズムから影響をうけたモダニズム芸術運動の中であって、登場人物の心理が重ねられて話が展開する源氏物語は本当に新しく新鮮な世界を欧米読者の前に差し出したと言えよう。ウェイリー訳はそれを見事に英語の小説として移し換えて見せ得た。『幻獣辞典』などで有名なあのボルヘス(Borges)もウェイリー訳の書評を書いたことがあり、「ムラサキの作品は、まさしく心理

11 オズワルド・ホワイト(Oswald White) "Parting: A passage from The Genji Monogatari", *Transactions of the Asiatic Society of Japan* Vol. L [50], 1922, pp. 79-95.

12 拙著『源氏物語英訳についての研究』武蔵野書院、2010、pp. 427-428、並びに前出6にあげた拙論参照のこと。

小説と呼ぶようなものであろう」としている¹³。当該書評は1939年に書かれている。ボルヘスがウェイリー訳を読んでいたというのも発見ではあるが、「心理小説」と明言しているのも、大変興味深い。実は源氏物語の文体はもうちょっと複雑なのであり、そのような文体の英訳にタイラー訳が挑んでいるわけであるが、これについてはこれまでも触れてきたし、また紙幅も尽きたので稿を謙ることとしたい¹⁴。

◆おわりに

アーサー・ウェイリー訳 *The Tale of Genji* は20世紀初頭の英語圏において、心理小説として読まれたということがいえるのではないかと、ということを見てきた。ウェイリーの訳文は、その文体に同時代作家の影響が投影され、また同時代作家はウェイリー訳 *The Tale of Genji* の文体や語り口に影響を受けたと言えよう。本稿において、この点について詳しく分析したわけではないが、既述したようにモダニズムの芸術運動の渦の中で、線条的な影響関係のもとAからBが出来上がり、BからCが出来てきたというのではなく、時代的文芸思潮の磁場のもとにおける現象として捉えていくべきものであろうと思われる。ダムロッシュは次のように言う「プルーストが「紫式部」を読んでいたという証拠はないが、彼の本は明らかに当時のフランスにおける日本趣味ジャポネズリーを反映している」(『世界文学とは何か』p. 458)しかし、常に文化論的な場に翻訳論を引きずり出さねばならないわけではない。「小説」の定義をゆるく捉えたまま、ウェイリー訳が「小説」として読まれたことをみることによって、ある文学が内包していた特性が全く異なる時代に時空を越えて

13 当該書評についてはソニャ・アーンツェン (Sonia Arntzen) 氏よりご教示を受けた。ボルヘス (Borges) の *Selected Non-Fictions, Volume 3* (Penguin Books, 2000), pp. 186-187. 原文は Murasaki's work is what one would quite precisely call a psychological novel.

14 当該文体のタイラー訳については、拙論「話法の英訳についての断章ー〈自由間接法〉から〈自由直接話法〉へ」、『文学・語学』第202号、2012などにおいて触れている。

その遺伝子を拡散し再生産してくということが幾分かは見えてくるのではないかなどと思うのである。しかしこれをどのように文学分析として衆目の前に晒すことができるのかについては、個人的には実はあまりわかっていないと言わざるを得ないのだが、不断の考究の努力が光明をもたらしてくれるものと信じる。

とはいえ世界文学としての地位を確実なものとした源氏物語を世界の文化遺産として、おそらくは日本人の目からみるなら誤解や偏見に晒される状況が引き起こされるかもしれないのではあるが、より開かれた世界でさらなる文化的変容を遂げるのを見ることは、日本人としてもう決して逃れることのできない現実となっているのではなからうか。

(早稲田大学非常勤講師)

1955年のサイデンステッカー訳蜻蛉日記について

川内 有子
かわうち ゆうこ

❖ 1. はじめに

『蜻蛉日記』は、サイデンステッカー (Edward G. Seidensticker) を嚆矢として、マッカー (Helen Craig McCullough)、アーンツェン (Sonja Arntzen) と、現在までに主に3人の翻訳者によって英訳がなされてきた¹。サイデンステッカーの翻訳は1964年に書籍として刊行されたものが『蜻蛉日記』の初めての全訳として知られているが、その9年前に Transaction of Asiatic Society of Japan の誌上に発表された全訳についてはあまり知られていない。ここでは、サイデンステッカーによる翻訳の1955年版と1964年版の比較を行い、『蜻蛉日記』受容史上であまり省みられることのない1955年版の個性について考えてみたい。

❖ 2. 『蜻蛉日記新釈』について

翻訳の背景を伝える資料は破棄されずに残っていることが稀であるが、1955年版については、サイデンステッカーの訳業に助力した小山敦子氏の上下2冊のノートが存在している²。このノートは『蜻蛉日記新釈』と表紙に記され、序文³によると1952年1月～5月にかけて書

1 『蜻蛉日記』の英訳については、古いものから順に、2つのサイデンステッカー訳 ("THE KAGERŌ NIKKI", *Transaction of Asiatic Society of Japan* (1955) と、*The Gossamer Years*, Charles E. Tuttle Company, Inc.(1964))、マッカーの日本古典文学の翻訳アンソロジーに収められた抄訳 (*Classical Japanese Prose*, Stanford: Stanford University Press, (1990))、そして最も新しい翻訳であるアーンツェンによる全訳 (*The Kagero Diary: A Woman's Autobiographical Text from Tenth-Century Japan*, Michigan: University of Michigan.(1997)) の4編が代表的な翻訳である。

2 『蜻蛉日記新釈』については、後掲の「新出資料『蜻蛉日記新釈』(上・下)」参照 (p.52-58)。

3 表紙の次の見開き左頁には、次のようにある。「本稿は昭和廿七年一月 E・G・

かれたものである。「英訳かげろう日記の母胎として」とあるように、岩波文庫版の本文をノートに挟み本文校訂に対する見解を書き加え、解釈については喜多義勇校訂の古典全書の頭注や与謝野晶子の現代語訳を並べ、訳業の参考となるよう執筆された。さらに、それらの解釈を検討した上での小山氏自身やサイデンステッカーの解釈が書き留められている。小山氏の注解ノート『蜻蛉日記新釈』（上・下）および、関連する小山氏の発言によって知る事ができることの1つは、サイデンステッカーが言及しなかったテキストについてである。サイデンステッカーは1955年版・1964年版どちらの版でも自らが用いたテキストについて序文で言及している。1955年版の序文においては、以下のように述べる。

Of modern texts, the Asahi Koten edition (Tokyo, 1949) and the Iwanami edition (in the Iwanami Bunko) seem as good as any ; ... This translation has been made principally from them. (6頁)

これによれば、喜多義勇氏校訂の古典全書版と岩波文庫版をテキストとして使用したということであるが、訳文と序文に示されたテキストを含めた注釈書類と照らし合せてみると、初めての現代語訳を付したテキストとして知られる喜多義勇氏校訂『蜻蛉日記講義 改訂増補版』の現代語訳に最も近いように思われ、また、1955年版の批評者によっても、

Both translators [稿者注：サイデンステッカーと1955年に同じく『蜻蛉日記』のドイツ語訳を発表したドイツ文学者、塚越敏のこと] are under great debt to Kita Yoshio, whose Kagero nikki kogi [rev. ed., Tokyo, 1944] is the only full-dress modern commentary. (Hamilton の review)

サイデンスティッカーの嘱に依り、蜻蛉日記英訳の業に協力し英訳蜻蛉日記の母胎として同年五月脱稿せるものである。有職故実に関しては恩師石村貞吉先生の御学恩に浴する事が出来た事を感謝する。」

のように、この現代語訳の恩恵を深くあずかったものである旨が指摘されていた⁴。しかし、『蜻蛉日記新釈』にはこの『蜻蛉日記講義 改訂増補版』から訳が引用されている箇所は見当たらない。サイデンステッカーの1955年版後の小山氏の以下のような発言は、こうしたテキストの参照の順序について整理してくれる。

昭和廿六年、東大大学院での院友、エドワード・G・サイデンス
ティック（以下Sと略す）から、蜻蛉日記英訳の話があった。…
当時私は池田先生の源氏大成の総索引が最後の追込みにかゝった所
で忙しかったから、Sは喜多教授の現代訳によって一通りの下訳を
つけておき、廿七年一月、総索引完成を期に池田先生の助手を辞し
て、二人で本格的に蜻蛉日記にとりかゝった⁵。

1952年の1月までにサイデンステッカーは『蜻蛉日記講義 改訂増補版』の現代語訳を英訳することで下訳を作り、岩波文庫版や古典全書版を参照して手直しをした、そのために手直しの段階で参照された『蜻蛉日記新釈』には下訳段階の参考書である『蜻蛉日記講義 改訂増補版』は引用されなかった、という背景が明らかになるのである。

◆ 3.1955年版から1964年版への改訂

サイデンステッカーの翻訳として現在読まれているものは1955年版に手が加えられて出版された1964年版である。この改訂に際しては、以下のような3つの指針に沿って行ったものであると翻訳者自身が述べている。

The reader who compares the revision with the earlier translation will find that changes are to be explained in three ways: by

4 *The Journal of Asian Studies*, Vol.16, No.1, Review by: Hamilton, Charles E., 1956, pp144-147

mistakes in that translation; by advances in textual criticism and particularly the appearance of the Iwanami edition in late 1957; and by a shift toward literalness in the principles governing the translation.⁵

この改訂に関して述べた文章は Japan Quarterly の誌上に発表されただけでなく 1964 年版の序文にも再掲され、この解説によって、誤訳が訂正され、新しい本文研究の成果が反映され、原典に対して一層忠実な翻訳⁶として改訂版が発表されたことになるだろう。そして、この解説の通りに 1955 年版から改善された翻訳としてみなされているからこそ 1964 年版が広く参照されているものとも思われる。

◆ 3. 2つの翻訳の比較

では、先に掲げたサイデンステッカーの改訂に関する 3つの指針 (①誤訳の訂正、②本文研究の進展、とくに 1957 年に出版された古典文学大系の反映、③原典への忠実性を求めての変更) は、実際の訳文上ではどのように現われているのであろうか。

1955 年版には、確かに、テキストの本文の問題やサイデンステッカーの解釈の表れとしては考えることのできない、誤訳と思われる部分もある。例として、道綱の生後間もない頃に兼家が町の小路の女の所へ通い作者への訪れが少なくなっていることを嘆いている場面の「日暮れ」の語の訳をあげる。

5 Seidensticker, Edward G. "On Retranslation", Japan Quarterly, (VII -4), 1960, pp487

6 サイデンステッカーの用いた "literalness" という語について、1997 年に『蜻蛉日記』の最も新しい全訳を発表された Sonja Arnzten 氏より、「一般的には逐語的と訳されるが、否定的な意味が付加されるので、文字の通りに訳すこと、と捉えておく方がよい」というコメントをいただいた。

【原文】

昔すきごとせし人も今はおはせずとか、など人につきて聞えごつを聞くを、ものしうのみ覚ゆれば、日暮れはかなしうのみ覚ゆ⁷。(54 頁)

(昔は仲のよかつた人も、今はもう通はれないさうだ、など、わざわざ聞える所で話してゐるのを聞くと、それがまた忌々しく思はれるので、日暮れの頃は殊に悲しく思われる。)

【1955 年版】

And I would hear my women talking among themselves of his current indifference-“He used to be so fond of her,” they would say-and my wretchedness would increase as dawn came on. (35 頁)

【1964 年版】

And I would hear my women talking among themselves of his current indifference-“He used to be so fond of her,” they would say-and my wretchedness would increase as night came on again. (41 頁)

原文でも現代語訳でも「日暮れは」「日暮れの頃は」となっている箇所について、1955 年版では夜明けを意味する “dawn” に訳され、それが 1964 年版への改訂の際には “night” へと直され、原典の意味する時間帯に近づけられている。これに類似する訂正の例は他にも数例見られ⁸、誤訳が訂正されたという点で 1964 年版の正確さは認めざるを得ない。

2 つめの変更点である本文研究の進展の反映に関しては、改訂箇所の比較から、岩波文庫版や古典全書版と大系との本文の変化ではなく、大

7 本文は、1955 年版の底本である喜多義勇校註『日本古典全書 蜻蛉日記』（朝日新聞社、1949 年）から引用し、ページ数を付す。現代語訳は、これも底本の 1 つとなっている喜多義勇校註『蜻蛉日記講義 改訂増補版』（武蔵野書院、1944 年）を引く。

8 例えば、「中の十日のほどに」（98 頁）を 1955 年版では “the end of the month” と訳し、1964 年版では “the middle of the month” と改めている。

系の語釈の上の解釈の変化に伴って改めたものと思われた⁹。こういった変更の1例目は、『蜻蛉日記』の序に近い、兼家から熱心な求婚を受けている記事にある。

【原文】(古典全書版)

さてあはつけかりしことどものそれはそれとして、柏木の木高きわたりよりかくいはせむと思ふことありけり。(43頁)

(さて、はかない一時的な恋愛事件などはそれとして、身分の高いあの方が、私に色よい返事をさせようと思はれることがあった。)

【原文】(古典大系版)

さて、あふなかりしすきごとどもの、それはそれとして、かしはぎの木高きわたりより、かくいはせんとおもふことありけり。

(109頁)

(頭注：兼家求婚以前の、多くの人からの好色懸想の事には今は触れないで。「あふなし」は、口先だけで実のないこと。)

【1955年版】

Though of course I had received love notes now and then, the Prince, was the first of my suitors who really insisted on being taken seriously. (25頁)

【1964年版】

I shall not touch upon the frivolous love notes I had received from time to time. Now the Prince was beginning to send messages. (33頁)

9 発表当日、席上の方々より、サイデンステッカーの『源氏物語』の英訳についても、本文よりもテキストとした注釈書の解釈から訳されているように感じられたというコメントをいただいた。

1955年版の訳は「時折恋文を受取っていたが、真剣に受け止めてほしいと言って来た人は Prince がはじめてであった」という、以前の恋文が一時的な懸想にすぎなかったということを間接的に示していた。しかし、1964年版では”frivolous”の一語によって「実がない」と断じる訳へと改められており、「「あふなし」は、口先だけで実のないこと。」と古典大系の語釈が同様に端的に注をしている点に注目すると、大系の語釈とこの箇所改訂が対応していることがわかる。また、これに類似する例は他にも見られる。『蜻蛉日記』中巻の唐崎への物詣での記事にさきがけての場面で、1ヶ月ほど体調が悪いからとやって来ない兼家と作者とのやりとりに関しての箇所である。まず、1955年版のテキストから見ていきたい。

【原文】(古典全書版)

「七八日大殿にて、念じてなむ、おぼつかなきに」など言ひて、
「夜のほどにてもあれば、かく苦しうてなむ、内へもまゐらねば、かく歩きけりと見えむも便なかるべし」とて歸りなどせし人、… (112頁)

(頭注：晝ならばかうして訪れたことがわかつてしまふが、まあ夜だからわかるまい。こんなに苦しくて、宮中にも参内しないので、かうして出歩いたことがわかつては工合が悪いだらう。)

(「七八日氣分が悪くてねてゐるが、我慢して出て来た、氣がゝりなので」など言つて「夜のうちだからまあよからう、こんなに苦しくて、宮中へも参内しないので、かうして出歩いたといふことが分かつてても工合が悪いだらう」とて歸つたりした人が、
…

語釈：覺束なきに 作者の事が氣がかりでの意。)

まず注意したいのは、古典全書版の本文や頭注でも『蜻蛉日記講義改訂増補版』の現代語訳においても「かえりなどせし人」に関して「歸」をあて、「覺束なきに」についても「氣がゝりなので」「作者の事が氣が

かりで」などと解釈しており、兼家は作者を気がかりに思って体調をおして訪ね、そして帰ったという解釈を明示している点である。一方、この点について1964年版のテキストである古典大系版では逆の解釈が示されている。

【原文】(古典大系版)

「七八日、おほとのにて念じてなん。おぼつかなきに」などいひて、「夜の程にてもあれば。かく苦しうてなん。うちへもまいらねば、かくありきけりと見えんも、びんなかるべし」とて、かへりなどせし人、…(188頁)

(頭注：念じてなん 加持祈祷をしてもらっていた。「念じてなん(ありける)」の略。

かく苦しうてなん 「なん(えこそまゐらね)」などの略。

かへりなど 作者より見舞の手紙に対して、返事などした。)

まず1955年版のテキストにおいては「歸」があてられていた「かへりなどせし人」について本文では仮名表記のままであり、頭注では手紙への返事とする解釈がされている。「かく苦しうてなん」については「えこそまゐらね」が省略されていると注をしており、兼家は作者のもとを訪れず手紙の返事のみをしたという解釈が一貫して示されている。以下に示すサイデンステッカーの翻訳も、

【1955年版】

For seven or eight days he had been barely able to call at the Minister's, he said, but he had decided to risk a visit here because I was so much on his mind. Since he had come at night, his visit would probably pass unnoticed ; it would not do to have it noised abroad, though, for after all he was absent from court on grounds of illness. With that he left,… (83頁)

【1964 年版】

For seven or eight days he had been confined at the Minister's, he said, amid priests and exorcists. He had hoped to risk a visit here late some night; but it would not do to have word get out, since he was absent from court on grounds of illness. The messenger said…
(73 頁)

1955 年版はそのテキストの解釈と同様に兼家は作者のことが気懸りでやって来たことと訳し (he had decided to risk a visit here because I was so much on his mind)、1964 年版の訳は大系の頭注を受けて「念じてなん」を「僧や祈祷師に取り巻かれて (amid priests and exorcists)」と訳している。また、「かく苦しうてなん」に含意されていると注がなされている「えこそまゐらね」を顕在化させて、大系の頭注の解釈にしたがった形で翻訳している。

3 つ目の変更点である原文への忠実性による改訂といえる例について見ていきたい。この種の改訂では、1955 年版がテキストとは異なる解釈をしており、それが 1964 年版ではテキストの解釈へと近づけられている。例えば、兼家からの求婚に関する一連の記述の中での以下の和歌の部分の訳について 1955 年版では原文の次に掲げのように和歌を省略して訳し、1964 年版では和歌を省略せず原文の用いている語を辿るように訳している。

【原文】

さるべき人してあるべきに書かせてやりつ。それをしもまめやかにうち喜びて繁う通はす。また添へたる文見れば、

濱千鳥跡もなぎさにふみ見ぬはわれを越す波うちや消つらむ

このたびも例のまめやかなる返りごとする人あれば、まぎらはしつ。(45 頁)

(然るべき人に適當に書かせてやつた。そんな返事をさへまと

もに喜んで盛んに通はせる。また添へてある文を見ると、
濱千鳥跡もなぎさにふみ見ぬは我れを越す波うちや消つらん

【1955 年版】

And so I had one of my ladies compose a poem, suitable but hardly warm, and even at this secondhand reply he seemed delighted. I was besieged with poems. One of them suggested that my failure to write my own letters probably told of other and more interesting suitors, but I continued to use a proxy, and he continued to complain of my coolness. (26 頁)

【1964 年版】

And so I had one of my ladies compose a poem, suitable but hardly warm, and even at this secondhand reply he seemed delighted. I was besieged with poems. One of them suggested that my failure to write my own letters probably told of other and more interesting suitors: "The plover's tracks are gone from the beach. Is it that the waves are higher now?" This too I answered by proxy. (34 頁)

改訂前の 1955 年版で和歌の代わりに訳文に記されているのは、この和歌についての「兼家は作者の冷淡さにひきつづき文句を言った (he continued to complain of my coolness)」というサイデンステッカーの解釈である。1955 年版の訳業の背景を知る事が出来る小山氏のノート『蜻蛉日記新釈』には、この箇所について、

結婚当初必ずしも作者側が乗気だったのでなく兼家の方が積極的であった為にそれに引摺られて結婚したのだということを再三彼女は力説している。

という小山氏の解釈が記されている。和歌を省略せず忠実に訳した1964年版からは兼家と作者の駆け引きにおいてこの歌がどのような意味を持っているのか明確にはわからない。しかし、1955年版の訳は和歌を訳さない代わりに、注解ノート『蜻蛉日記新釈』に書かれた解釈のような積極的な兼家と乗気でない作者という対比を分かりやすく示している。1955年版において意識がなされている箇所には、このように、文脈とのつながりを原文よりも明確に示している例が多く見られる。相撲の見物へと出かけた道綱の帰宅に関する中巻の記事においても類似した例が存在する。

【原文】

暮には此方ざまに物し給ふべき人の、さるべきに申しつけておく。あなたざまにときくにも、ましてあさまし。(126頁)
(夕方には此方の方角に歸つて來られる人の、然るべき方に言ひつけておく。自身はあちらへと聞くにも、ましてあきれてしまふ。)

「あなたざまに」について、現代語訳においても「あちらへ」と解釈しているが、1955年版では、「あちらへ」を新しい女性として具体的に訳出し、その後ろに原文にはない部分を付け足している。

【1955年版】

In the evening he came back escorted by an official of some rank who happened to be coming my way. The Prince of course should have come too, and I was much chagrined to hear that he had gone to visit his newest lady, after getting rid of the boy. (105頁)

サイデンステッカーの意識は、兼家が息子を厄介払いして女のもとへ出かけたことを作者が不快に思っていることを直接本文上に示し、作者が石山詣でへ出向くに至るまでの鬱々とした気分が募る一連の記事の中で

この箇所の位置付けを明確にしている。この箇所は、1964年版では、下に示すように意識による補足は削除され、原文に忠実な形へと改められ、「あなたさま」は含みを持たせて訳されていた。

【1964年版】

In the evening he came back escorted by some underling, when the Prince of course should have come himself. I was much chagrined to hear that he had business “elsewhere.” (91頁)

◆4. おわりに

現在、注目されることはほとんどない1955年版であるが、1964年版との比較を通して、『蜻蛉日記講義 改訂増補版』を基礎に持ちつつ読者の読みやすさに重点を置いて訳を行ったという特徴が明らかになった。この読みやすさという特徴は、訳業の助言者であった小山敦子氏も以下のように評価している。

訳文があまりに意識でありすぎる、という批評があるが、読まれない直訳よりはむしろ読まれる意識の方がよい。訳文のよしあしは私には云々する資格がないが、Sに言わせると、ウェリィの訳に垂ぐ名訳なのだそうである¹⁰。

小山氏の「読まれない直訳よりはむしろ読まれる意識の方がよい」という評価につづく文面からは、1955年版に対するサイデンステッカーの自負もうかがえる。また、1964年版と読み比べた批評者によっても、読みやすさは1955年版の長所として評価されており¹¹、1955年版は単なる1964年版の下地としてのみ評価されるべきでない翻訳といえるの

10 小山敦子「『英訳蜻蛉日記』について」『國文學 解釈と教材の研究』(2-10)、至文堂、1957、p65

11 Review by: Flood, C. B., Monumenta Nipponica,(20-1/2),1965, pp.236-238

ではないだろうか。サイデンステッカー自身、1955年版が『蜻蛉日記』の初めての外国語訳であるということは翻訳当初から念頭にあったと思われる、作品を紹介し読者を得ようとする意欲がそうした訳文から看取される。

(立命館大学・大学院博士後期課程 1 回生)



カナダ国際研究交流集会レポート

海野 圭介
うんの けいすけ

シンポジウム「日本古典文学の可能性と異文化の交響」

日 時：2014 年 9 月 26 日（金）

主 催：科学研究費補助金基盤研究（A）「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」（課題番号 25244012、研究代表者：伊藤鉄也）、科学研究費補助金基盤研究（A）「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」（課題番号 22242010、研究代表者：今西裕一郎）

会 場：ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）アジアセンター

東京にくらべ一足先に秋の訪れが感じられる 9 月終わりのバンクーバーで、上記科研費研究プロジェクトによる主催により、ブリティッシュ・コロンビア大学のジョシュア・モストウ教授（Prof. Joshua Mostow）のご協力を得て、日本文学の翻訳に関するシンポジウムが開

催された。プログラムは下記の通り。

- 10:00 開会の挨拶 Opening Remarks
ジョシュア・モストウ (Joshua MOSTOW / ブリティッシュ・コロンビア大学 教授)
- 10:05 伊藤鉄也 (ITO Tetsuya / 国文学研究資料館 教授) による科研趣旨説明
- 10:10 ゲルガナ・イワノワ (Gergana IVANOVA / シンシナティ大学 准教授)
「英訳された『枕草子』が作り出した大衆文化」
"The Pillow Book in English Translation and Popular Culture"
- 10:40 緑川眞知子 (MIDORIKAWA Machiko / 早稲田大学 非常勤講師)
「小説として読まれた英訳源氏物語」
"Reading Lady Murasaki's 'novel': the reception of Genji monogatari "
- 11:30 川内有子 (KAWAUCHI Yuko / 立命館大学 大学院博士後期課程 1 回生)
「1955年のサイデンステッカー訳蜻蛉日記について」
"Concerning the 1955 Seidensticker Translation of Kagerô nikki"
- ディスカッション Discussion

当日朝早くより多くの研究者・学生・バンクーバー在住の方々が集まるなか、モストウ教授による開会の挨拶があり、「翻訳からみた平安文学 ("Heian Literature as Seen in Translation")」の研究報告と討議が行われた。

ゲルガナ・イワノワ (Gergana Ivanova / シンシナティ大学 准教授)「英訳された『枕草子』が作り出した大衆文化」は、ウェイリー訳『枕草子』の影響圏の広さ (ピーター・グリナウェイの映画『ザ・ピロー・ブック』や歴史小説などへの影供) とその享受された理解の偏向性 (エロティックな面が強調されすぎる点など) を指摘し、翻訳を通した日本文学の享

受の歴史の多様な側面への注視が新たな興味深いテーマを開拓することを事例を以て示した。

緑川眞知子（早稲田大学 非常勤講師）「小説として読まれた英訳源氏物語」は、世界文学としての『源氏物語』の誕生前後の時代背景とそれに関わった人々の理解の混淆や評価のゆれなどをアーサー・ウェイリー（Arthur Waley）訳『源氏物語』への書評を読みつつ丁寧に辿り、現在通行するロイヤル・タイラー（Royall Tyler）訳との翻訳の相違を併せ見ること、近代以降の翻訳の展開とその目的の変遷などについて具体的に指摘した。単なる翻訳技法論に留まらず、翻訳を検討する行為が切り開く可能性の広さを指し示した。

川内有子（立命館大学 大学院博士後期課程 1 回生）「1955 年のサイデンステッカー訳蜻蛉日記について」は、1955 年に著されたサイデンステッカー（Edward Seidensticker）訳『蜻蛉日記』（初回訳）の翻訳態度の分析とその再評価を行った。また、丹下暖子氏による紹介のみで知られていた、小山敦子氏がサイデンステッカー氏の翻訳に協力するために作成した注解ノート『蜻蛉日記新釈（上・下）』にも触れ、伊藤鉄也氏が保管する「蜻蛉日記新釈」そのものも回覧された。

上記 3 件の研究報告の後には、The Kagero Diary: A Woman's Autobiographical Text from Tenth-Century Japan, Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1997 の著作のあるソーニャ・アーンツェン教授（Prof. Sonja Arntzen トロント大学）によるコメントがあり、同氏を交えて『蜻蛉日記』の翻訳を端緒にフロアを交えて討議が行われた。翻訳者としての立場と研究者としての立場の違い、翻訳という行為が生み出す新たな享受の可能性やその裏面としての誤読・誤解が普及してしまう可能性の指摘と注意、さらには誤読や深読みが作り出す創造的享受に対する評価や反省等々、さまざまな立場や考えからの意見が出された。翻訳の〈正しさ〉とは何か？ という繰り返し問われてきた（問われるべき（？））原理的な課題の追求がなされる一方で、多くの言語に姿を変え、さまざまな文化コードの間を生き続ける作品の生命とは何か？ といった物語の本質、あるいはその社会的機能に及ぶ議論など興



味深い討議が重ねられた。

当日はシャラリン・オルバー教授 (Prof. Sharalyn Orbaugh)、クリスティーナ・ラフィン准教授 (Assoc. Prof. Christina Laffin)、ステファニア・バーク上級講師 (Dr. Stefania Burk, Senior Instructor) をはじめ UBC の大学院生の方々にシンポジウムの内外で大変お世話になった。末尾であるが記して感謝の意を述べたい。

(国文学研究資料館 准教授)

新出資料『蜻蛉日記新釈』（上・下）

伊藤 鉄也
いとう てつや
浅川 槇子
あさかわ まきこ

『源氏物語』の研究者として『源氏物語の研究—創作過程の探求—』（武蔵野書院、1975年）の業績のある小山敦子先生に、偶然のことながら今回お目にかかる機会を得た。小山先生は昭和49（1974）年に、本論文により東京大学で学位を取得された。

現在85歳だが、まだまだお元気で、長時間にわたりたくさんのお話をしてくださった。

小山先生は、横浜共立学園から東京女子大学、そして昭和22（1947）年に東京大学に入れ、大学院では池田亀鑑氏のもとで学ばれた。昭和36（1961）年以降は米国イエール大学研究員、オーストラリア国立大学研究員、ハワイ大学助教授、マラヤ大学教授を歴任された、まさに国際舞台上で活躍された方である。

日本に帰国後は、生涯教育に専念されて今に至っておられる。

小山先生の手になる注解ノート『蜻蛉日記新釈』（上・下、各168頁）が、今、私の手元にある。

今回、小山先生にお目にかかる機会があり、この2冊の手控え帖を託された。上巻の巻頭には、次のように書かれている。

本稿は昭和廿七年一月

E・G. サイデンスティックの囑に依り、蜻蛉日記英訳の業に協力し英訳蜻蛉日記の母体として同年五月脱稿せるものである。

有職故実に関しては恩師石村貞吉先生の御学恩に浴する事が出



来たことを感謝する。



ここでは、岩波文庫の『蜻蛉日記』をもとにして、詳細な注解がなされている。

本文の校合も、赤字でなされていることが見て取れる。

とにかく、精緻な本文調査の跡が顕著な『蜻蛉日記』の注解ノートである。

今回、はじめて日の目を見た手書きの資料である。

実はこれは、若きサイデンスティック（Edward G. Seidensticker）氏が『蜻蛉日記』を英訳するにあたり、小山先生がその手助けをなさった時の貴重な記録でもある。

この注解ノートを横に置いて、完成したサイデンスティック氏の英訳を読むと、その背景にある知識の伝授と翻訳の過程が解明できるはずだ。

今回伺った小山先生のことばによると、サイデンスティック氏の訳は拙くて、たくさんの手を入れながら進めたので大変だった、とのことだ。

私はかつて、『データベース・平安朝日記文学資料集 第2巻 蜻蛉日記』（伊藤鉄也・関本幸子共編、同朋舎、1991年）を刊行したことがある。

なお、小山敦子先生が書かれた「英訳蜻蛉日記について」(『國文學解釈と教材の研究』第2巻10号)は、サイデンスティッカー訳『蜻蛉日記』の背景がわかる、活字化された唯一のものとして貴重なものである。その冒頭部分を引用する。

昭和廿六年、東大大学院での院友、エドワード・G・サイデンスティッカー(以下Sと略す)から、蜻蛉日記英訳の話があった。国際的に意味のある仕事であり、蜻蛉に眼をつけたのはさすが、と思ったが、当時私は池田先生の源氏大成の総索引が最後の追込みにかゝった所で忙しかったから、Sは喜多教授の現代訳によって一通りの下訳をつけておき、廿七年一月、総索引完成を期に池田先生の助手を辞して、二人で本格的に蜻蛉日記にとりかゝった。平安朝の語彙と解釈には自信があるが、この蜻蛉には恐れ入った。若い二人がさぞ愉しくやたらう思われる向があればとんでもない話で、この難物と取り組んでは、脇目もふれず一路邁進あるのみであった。Sは始め興味のある部分のみの抄訳のつもりでいたが、池田先生の御意向を体した私が全訳を主張し二時間に亘る激論の末、遂に私が押切った。(尤もレディーズ・ファーストのせいかも知れない)全訳にした事は久松先生も、「あなたのお手柄です」とほめて下さったけれど、面白くもおかしくもない冗長な部分に入る度に、Sは顔をしかめては、「ああつまらねえ、皆敦子が悪いんだよ」と愚痴った。

Sが向うの大学の関係で、その夏どうしても一旦



帰省しなければならなかったので、それ迄に完成する事を目標に、雪の日も風の日も必死に原文の検討と訳文の推敲に当たった。もし喜多教授の半生を献げられた貴重な基礎研究がなかったら、私たちはあの短期間に、とても翻訳どころではなかったであろう。何しろ英語にするには、行方不明の主語から探さなくてはならない。日本語の曖昧さに、癩癩の起きる毎日であった。アーサー・ウェリーの源氏が、訳としては名訳だが、日本人の学者がもっと協力していたら避け得られた誤訳の多いことを思うと、一瞬も気はゆるせない。(65 頁)

この2人の協力による英訳『蜻蛉日記』は、昭和30(1955)年6月に、Asiatic Society of Japan(アジア協会)から紀要として刊行された。これはさらにその後、昭和39(1964)年に『The Gossamer Years: the Diary of a Noblewoman of Heian Japan』としてCharles E. Tuttle社から刊行された。その後、この版が再版を重ねている。

私が実施して来た科研の報告書『日本文学研究ジャーナル 4号』(素稿は福田秀一、大内英範、岩原真代氏、2010年3月)に収録されている「翻訳事典」と『日本古典文学翻訳事典1』(素稿は上記の三氏、2014年3月)の中から、『蜻蛉日記』の英訳に関する書誌データを、抜き出しておく。

(1) THE KAGERŌ NIKKI

: Journal of a 10th Century Noblewoman

翻訳者 Edward Seidensticker [1921-2007]

出版社 The Asiatic Society of Japan

刊行年 1955年、タイトルを変更して1964年に再版。

頁数 258頁

翻訳に用いた底本

・喜多義勇校訂『日本古典全書 蜻蛉日記』(朝日新聞社、1949年)

・喜多義勇校訂『蜻蛉日記』〈岩波文庫〉(岩波書店、1942年)

参考文献

・喜多義勇校訂『蜻蛉日記講義 改訂増補版』(武蔵野書院、1944年)

(2) The Gossamer Years

: The Diary of a Noblewoman of Heian Japan

翻訳者 Edward Seidensticker [1921-2007]

出版社 Charles E. Tuttle Company

刊行年 1964年 初版は、1955年 (The Asiatic Society)、
再版は1973年 (ペーパーバック版)、1974年 (Charles E.
Tuttle Company)、2001年 (Tuttle Publishing)。

頁数 201頁

翻訳に用いた底本

・鈴木知太郎、川口久雄、遠藤嘉基、西下経一校注『日本古典文学
大系 20 土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』(岩波
書店、1957年)

メモ・その他

・「Unesco Collection of Representative Works : Japanese
Series (ユネスコ代表的作品選集 日本シリーズ~)」の1冊。

(3) The Kagerō Diary

翻訳者 Sonja Arntzen [1945-]

出版社 Center for Japanese Studies, The University of
Michigan

刊行年 1997年、ペーパーバック版。本書刊行の翌1998年にハー
ドカバー版も刊行。2012年にはタイトルを変更し、オンデマン
ド書籍としてlulu.comから発行される。

頁数 [15] + 415頁

翻訳に用いた底本 情報無し

メモ・その他

・「Michigan Monographs in Japanese Studies, Number 19」
の1冊。Sonja Arntzen は、British Columbia 大学で日本文学

の博士号を取得し、Alberta 大学助教授を経て、現在トロント大学教授。

(1)と(2)が、サイデンスティッカー氏による英訳である。それ以外に、もう1つ翻訳されていることがわかる。この『日本文学研究ジャーナル』と『日本古典文学翻訳事典』での解説は非常に簡略なものに留まっている。しかし、その背景には、サイデンスティッカー氏と小山先生とのやりとりによる、上記のような事情のもとにあって完成したものであったことがわかる。

今回お預かりした『蜻蛉日記新釈』(上・下)の出現により、サイデンスティッカー氏による上記(1)(2)の2種類の英訳の詳細が、この資料から浮き彫りにすることができる。

このことは、新たな研究資料の出現として、研究がほとんどなされていない『蜻蛉日記』の英訳において、大いなる意義を有するものとなるはずである。

なお、池田亀鑑氏の『花を折る』に「英訳「かげろふ日記」」という一文がある。

これは、昭和30(1955)年6月24日の毎日新聞に掲載されたものである。

そこには、小山先生がサイデンスティッカー氏の訳に関わったことについては、一言も触れられていない。

Sさんが大学院で学生たちと一緒に源氏物語の研究をはじめたから、もう五年になる。一語一語、たんねんに原文と取り組んだものだ。源氏のリアリズムはどこからきたか、Sさんはその先駆を「かげろふ日記」に見た。これをマスターしようと、早速英訳に着手した。(中略)まだテキストの基礎研究ができていないので難解極まる作品だ。(中略)

Sさんは驚くべき努力を傾けて黙々とその研究を続けた。(中

略)「おかげさまでできました。ずるぶんお世話になりました。どうも、ありがとうございます」とさもうれしきうに、幾分はにかんで紅潮した笑顔であいさつした。見るとそれは待望の英訳「かげろふ日記」だった。(中略) わたしも夢中になって、Sさんの宿望が成就したことを喜んだ。日本の学者にさへもなかなかできなかつた仕事を、Sさんの忍苦はたうとうやり遂げた—。(221 頁)

小山先生が池田亀鑑氏に、自分の助力について何もおっしゃらなかったのか、池田亀鑑氏がそのことを無視されたのか。

前掲した小山先生の文章によると、『蜻蛉日記』の英訳は、ちょうど『源氏物語大成』の索引作成に没頭されていた時でもあり、池田亀鑑氏が失念しての文章かとも思われる。しかし、小山先生は「池田先生の御意向を体した私が」と言っておられることから推して、これは池田亀鑑氏が無視したと考えられる。

このことは、今回の小山先生との面談では、特に確認できなかったことである。しかし、池田亀鑑氏の小山先生に対するそれまでの姿勢からして、小山先生を嫌っての無視だったと思われる。

(伊藤鉄也のブログ「鷺水亭より」／2010年3月10日の記事から)

(国文学研究資料館教授)
(国文学研究資料館研究員)

研究の最前線



『源氏物語』韓国語訳と 李美淑注解『ゲンジモノガタリ 1』

李 美淑
い みすく

◆これまでの『源氏物語』韓国語訳

2014年10月30日、韓国において3番目の『源氏物語』韓国語訳の第1冊がソウル大学校出版文化院から筆者の注解で刊行された。2007年瀬戸内寂聴の現代語訳の韓国語訳をも入れると韓国において4番目の『源氏物語』の韓国語訳になるが、一応原文に即したと標榜する韓国語訳としては3番目の試みになる。これまで『源氏物語』全巻の韓国語訳は1973年と1999年2度にわたって刊行されたが、『源氏物語』研究者による全巻の翻訳・注解書は未だに出ていなかった。そこで、今回刊行された『ゲンジモノガタリ 1』は韓国初の『源氏物語』研究者による全巻の翻訳・注解書の第1冊目ということになる¹。

1973年初の『源氏物語』の韓国語訳は柳呈(ユ・ジョン)氏の翻訳によって乙酉文化社から出版された『ゲンジイヤギ』(以下、柳訳)であり、1999年の田溶新(チョン・ヨンシン)氏の翻訳による『ゲンジイヤギ』(以下、田訳)はナナン出版から刊行された。〈イヤギ〉とは、物語のことである。この2種の『源氏物語』の韓国語訳については既に金鍾徳氏の論をはじめとするいくつかの論文²があるが、そのほとんど

1 ただ抄訳ではあるが、韓国の代表的な『源氏物語』研究者である金鍾徳氏によって『ゲンジイヤギ』(ジマンジ、2008年2月)1冊が刊行されている。

2 金鍾徳「韓国における源氏物語研究」(『近代の享受と海外との交流』、源氏物語講座 9、勉誠社、1992年2月)、金順姫「韓国における『源氏物語』の研究」(『国文学解釈と鑑賞』1994年3月号、至文堂)、日向一雅「朝鮮語訳『源氏物語』について」(『源氏物語の準拠と話型』、至文堂、1999年3月)、金鍾徳「韓国における近年の源氏物語研究」(『国文学解釈と鑑賞』2000年12月号、至文堂)、李美淑「『源氏物語』の外国語訳―「真木柱」巻を中心に―」(仁平道明編集、『源氏物語の鑑賞と基礎知識-No.37 真木柱』、至文堂、2004年11月)など。

において、テキストとは離れた誤訳及び注解の不徹底さが指摘されている。

上・下2巻(上巻は「桐壺」巻～「藤裏葉」巻、下巻は「若菜上」巻～「夢浮橋」巻)構成の柳訳は去年まで絶版となっており、1975年の新装版が大学図書館などに所蔵されているだけであったが、2015年1月版本を異にし、東西文化社から再び刊行された。柳訳には上巻の冒頭に「解題」といい、『源氏物語』の文学的な意義や作品の構成(3部構成説)・主題、作者の紹介など作品に関する全般的な解説がなされており、下巻の末尾に年譜が付いている。その解説によれば、柳訳は青表紙本を底本としている日本古典文学大系(岩波書店版)の『源氏物語』を底本とし、与謝野晶子らの現代語訳を参考にしてしているとするが、大系の本文よりは現代語訳に即したという指摘が多い。

柳訳は、訳者本人も「解題」において述べている通り、固有名詞や和歌の翻訳に苦心したように受け取られる。その結果、巻名において理由は定かではないが、桐壺・帚木・空蝉・葵・須磨・明石・玉鬘・浮舟の8つの巻は日本語の発音通りに表記されているのに対し、他の巻は「真木柱」巻が<ノソンナムキドン>となっているように、韓国語に訳されているのである。人名の表記においても光源氏や空蝉などは<(ヒカル)ゲンジ>、<ウツセミ>のように日本語の発音に表記されているのに対し、夕顔と玉鬘などは<バッコッ>、<オクドングル>という韓国語に訳されており、統一性に欠けている。和歌の翻訳においては韓国独特の韻文形式である時調(シゾ)に倣うとしているが、和歌の音数律のままではないものの後の田訳に比べると作品内における和歌の機能及び位置を理解した上での訳であると思われる。

1999年1月、柳訳と同じく『ゲンジイヤギ』という書名でナナン出版から3巻(1巻は「桐壺」～「朝顔」巻、2巻は「少女」～「幻」巻、3巻は「匂宮」～「夢浮橋」巻)構成で刊行された田訳は、その翻訳上の問題がより多く指摘されてきた。田訳には、詳しい作品解説は付いておらず、ただ1巻の冒頭に3頁程度の<訳者序文>があり、紫式部や作品の成立や流布、研究などについて簡単に紹介されている。その序文に

よれば、翻訳に用いられた底本は 1976 年に全巻が揃った小学館の日本古典文学全集(全 6 巻)であるとし、その現代語訳を先ず翻訳し、翻訳しがたいところは原文を参考にしたとする。巻毎に全集と同じく光源氏の年齢やその巻の梗概が紹介されており、各冊の開きに何の説明もなしに 3 部構成説に従って 3 部に分類した『源氏物語』54 巻の巻名が全て記されている。

ところで、田訳が原文に依らず現代語訳を優先し翻訳したということは、和歌の翻訳において大きな問題点を露呈している。というのは、和歌の翻訳において音数律などは全く無視され、その意味だけが詳しく散文体で記されているため、作品における和歌の機能やそれなりの形式は韓国の読者に全く伝わっていないのである。和歌の翻訳が山括弧で区別されてはいるものの、場合によっては和歌が会話文や心中思惟のように受け取られるおそれもある。和歌における翻訳上の問題以外に、田訳は固有名詞の表記や敬語の翻訳などにおいても曖昧なところが多い。巻名は、須磨(スマ)・明石(ミョンソク)・少女(ソニョ)・匂宮(ネゲン)・紅梅(ホンメ)のように漢字の韓国語の発音で表記された 5 巻以外は、全て韓国語に訳されている。例えば、桐壺は<オドンエバン=桐の部屋>、空蝉は<メミホルム=蝉の殻>のようになっているのである。しかし、人名と官職名においては<(ヒカル)ゲンジ>と表記された光源氏以外は、鬚黒大将は<スフクデザン>、玉鬘は<オクマン>、内大臣は<ネデシン>のように全て漢字の韓国語の発音で表記されているため、巻名と人名が一致している場合でも異なる表記になっており、人名・巻名に含まれた意味合いが伝わっていない。例えば、「真木柱」巻に限ってみても、巻名は<ノソンギドン=檜の柱>となっているのに対し、人名は<ジンモクジュ>という漢字の韓国語の発音に表記されているのである。その他、敬語も正確に翻訳されておらず、誤訳も相当目に付く。

が、全体的に多くの問題点を持つとはいえ、この 2 種の韓国語訳はこれまで韓国の読者に広く『源氏物語』を紹介したという点においてはその意義を認めるべきであると思われる。

◆文明テキストとしての『源氏物語』韓国語訳

李美淑注解『ゲンジモノガタリ 1』は、東西洋古典の翻訳・注解を主要事業としているソウル大学校人文学研究院H K 文明研究事業団が発行する〈文明テキスト〉叢書第 22 巻として刊行されたものである。H K とは、Humanities Korea の略字で、H K (人文韓国) 事業とは人文学振興のために 2007 年 11 月から韓国研究財団が支援するプロジェクトである。本書は事業開始からソウル大学校人文学研究院の H K 事業に参加した筆者の 2 度目の翻訳・注解書になる。2011 年 5 月に刊行した『蜻蛉日記』の韓国語訳・注解に続くものである。

『ゲンジモノガタリ 1』は、先行する 2 種の韓国語訳の限界を超え、底本の原文に充実した翻訳と詳細な注解を通して作品の持つ本来の姿を韓国語に再現しようと試みたものである。その翻訳・注解は、次のような方針のもとで行われた。

まず、李美淑注解『ゲンジモノガタリ』は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語①～⑥』(新編日本古典文学全集、小学館、1994～1999 年)を底本にし、翻訳・注解するものである。底本と同じく全 6 冊で完訳する予定であり、『ゲンジモノガタリ 1』は、「桐壺」巻から「花宴」巻までの 8 つの巻を対象にした。

次に、『ゲンジモノガタリ 1』は大きく〈解題〉、〈本文〉、〈付録〉の 3 つに構成されている。〈解題〉は「女性のために女性が書いた女性の世界を描いた物語」という題で、女性文学としての『源氏物語』の性格を強調する一方、①昔物語から『源氏物語』へ、②サロン文化の結晶体『源氏物語』、③作者紫式部、④成立時期と構成、そして主題と女物語、⑤『源氏物語』の形成と東アジアの文化交流、⑥本文、⑦注釈・研究史、⑧後代に及ぼした影響及び受容史、⑨『源氏物語』韓国語訳・注解とその意義、といった 9 つの項目に分けて約 50 頁にわたって作品全体を詳しく解説した。〈本文〉は翻訳と注、そして巻毎の解説に成っている。翻訳は底本に倣って巻毎に段落を分けて翻訳し、段落毎に番号

とタイトルをつけた。タイトルは底本を参照し訳注者がつけた。注は脚注の形にしており、用語の解説、前後文脈の説明、引用の典拠など作品の理解を深める内容だけではなく、文明のテキストとして平安時代の日本文化を理解するための社会制度及び生活文化と関わる事項も記述した。巻の末尾につけた解説では、巻名の由来と作品全体におけるその巻の位置と意義、そして『源氏物語』の主題と関わらせて巻の内容などを分析した。注と巻の解説は底本の新全集だけではなく、玉上琢彌氏の角川書店の評釈、岩波書店の大系・新大系、新潮社の集成、至文堂の『源氏物語の鑑賞と基礎知識』なども検討して捕捉しており、注解者の本文解釈及び作品の読み一筆者の著書である『源氏物語研究—女物語の方法と主題』（新典社、2009年4月）における読みをはじめとするこれまでの論考における『源氏物語』の理解が下敷きになっている—も反映した。〈付録〉は『ゲンジモノガタリ1』の年譜、主な登場人物の紹介、人物関係図、参考文献、索引に構成されている。他に、〈関係資料〉という欄を設け、カラー印刷で『源氏物語』関係の写本、注釈書、源氏絵、断簡などを紹介した。これらの資料と表紙に用いられた鎌倉時代の『源氏物語』古系図の断簡は、東北大学名誉教授の仁平道明先生御所蔵のものである。ただ、1冊目は仁平先生の御厚意に何とか資料を載せることができたものの、2冊目からは著作権使用料の問題もあってまだどうするか決まっていない。

第3に、表記の問題であるが、李美淑注解『ゲンジモノガタリ1』の韓国語訳においては、書名及び巻名を日本語の発音のまま表記した。これまで〈物語〉は韓国において〈イヤギ〉として多く訳されてきたが、〈物語〉を日本特有の文学様式と見なし、〈モノガタリ〉をそのまま用いることにした。例えば、〈「桐壺」巻〉は〈「キリツボ」グオン〉というふうに表記した。なお、人名と地名、呼称、敬語、時制、指示詞なども『源氏物語』表現の独自性と判断し、できる限り原文を生かすことを原則とした。制度や役所名、官職名、宮中の殿舎名、漢籍名、雅楽名などは韓国式の漢字音通り表記した。官職名と殿舎名が人名に用いられる場合にも韓国式の漢字音通り表記した（たとえば、弘徽殿女御はくホ

ンフィジョンヨオ>)。

第4に、翻訳の原則について紹介したい。本文の翻訳は原則的に底本の原文に即した。ただ、主語と表現が多く省略されている古典散文であるだけに、主語と述語、その他の表現を補ったり文を細分したり語順を変えたりしたところがある。例えば、『源氏物語』は地の文と和歌が続く場合が多いが、和歌の前で文を切って和歌を独立させた。和歌は本来の音数律を生かすために上の句と下の句に分けて2行配置し、ハンゲルで5・7・5／7・7音に合わせて翻訳した。和歌には詠者をも記した。なお、光源氏が主語の文の場合ほとんど主語が省略されているが、本書では「ゲンジニム＝源氏の君」という主語を補充した。

なお、李美淑注解『源氏物語』韓国語訳は韓国研究財団が支援するソウル大学校人文学研究院HK文明研究事業団の翻訳・注解事業の一環であるため、『ゲンジモノガタリ2』はその事業の段階に合せ、2016年下半期に刊行する予定である。

(S E O U L 大学校人文学研究院 HK 研究教授)

スペイン語に訳された『源氏物語』の書誌について

浅川 槇子
あさかわ まきこ

◆1. はじめに

日本文学は古典・近現代作品を問わず、世界各地で翻訳されている。そのうち、古典文学で最も多くの言語に翻訳されている作品は『源氏物語』である。伊藤鉄也氏のご教示によると世界で32言語に翻訳されている。それでは具体的に、どの言語に翻訳された本が一番多いのか。同氏監修の『『源氏物語』翻訳史』¹によると、アーサー・ウェーリー (Arthur Waley) の The tale of Genji を初めとして、英訳された本が圧倒的に多い。フランス語訳とスペイン語訳がそれに続く。翻訳者に焦点をあてると、フランス語訳では、ルネ・シフェール (René sieffert) 訳の Le dit du Genji を重版したものが最多である。特に、近年刊行されたフランス語訳『源氏物語』は、シフェール訳の重版である。以下、『『源氏物語』翻訳史』を参考にまとめる。

【フランス語訳『源氏物語』】

〈1〉 アルヴェード・バリーヌ (Arvède Barine) 訳

- ・タイトル：La haute société japonaise au Xe siècle: Un don Juan japonais
- ・刊行年：1883年

〈2〉 ミシェル・ルヴォン Michel Revon 訳

- ・タイトル：Le Ghennji monogatari
- ・刊行年：1910年

1 海外源氏情報『『源氏物語』翻訳史』http://genjiito.org/genji_history/ (2014年10月27日閲覧)

- 〈3〉 ヤマタ・キク (Kiku Yamata) 訳
- ・タイトル：Le Roman de Genji
 - ・刊行年：1928 年／1952 年（1928 年の再版）
 - ・底本：Arthur Waley, The tale of Genji
- 〈4〉 シャルル・アグノエル (Charles Haguenaer) 訳
- ・タイトル：Le Genji monogatari
 - ・刊行年：1959 年
- 〈5〉 ルネ・シフェール (René Sieffert) 訳
- ・タイトル：Le dit du Genji
 - ・刊行年：1977 年版／1978 年版（1977 年の再版）／1985 年版（1977 年の再版）／1988 年版（完訳）／2007 年版（完訳）／2011 年（完訳）
 - ・底本：『日本古典文学大系』・『日本古典文学全集』・『新潮古典集成』
- 〈6〉 ルネ・ド・セカッティ (René de Ceccatty) ／中村諒二 (Ryoji Nakamura) 訳
- ・タイトル：Le Roman de Genji
 - ・刊行年：1982 年
- 〈7〉 イナルコ翻訳グループとパリ第 7 大学の研究者による訳（未完）
- ・タイトル：Le Roman du Genji ; Le clos du Paulownia
 - ・刊行年：2008 年

一方、スペイン語訳は特定の翻訳の重訳や重版というより、近年も次々と新しい訳が生まれてきている。現在、7 種類の翻訳があり、そのうち 6 種類が書籍として刊行されている。その現状もふまえて、今年度はスペイン語に翻訳された『源氏物語』を中心的に扱った。今回は、それらの本の書誌を中心に見ておきたい。

◆2 スペイン語訳『源氏物語』の書誌

スペイン語に翻訳された『源氏物語』について、適宜、本文や底本をあげて紹介する。なお、本文は該当する本から引用する。スペイン語から日本語への訳し戻しは、翻訳担当者から提供されたデータを使用した。翻訳担当者のうち、母語としてスペイン語を使用している母語話者と、母語がスペイン語ではない非母語話者の2種類の訳がある場合は両方をあげた。また底本が判明している翻訳についてはその底本を引用し、底本の本文と注を日本語に翻訳した書籍がない場合は、本稿執筆者が直訳したデータを使用した。以下は底本の一覧である。

〈底本一覧〉

- 〔1〕 Arthur Waley, *The tale of Genji*, Charles E. Tuttle Company, 1971
- 〔2〕 佐復秀樹『ウェーリー版 源氏物語 1』平凡社、2008年
- 〔3〕 Royall Tyler, *The Tale of Genji*, Viking, 2001年
- 〔4〕 阿部秋生他校注・訳『日本古典文学全集 源氏物語 1』（小学館、1970年）※再版

(1) La fugitiva de Chujo

- ・ 翻訳者：マヌエル・タバレス (Manuel Tabares)
- ・ 出版社／出版地：Editorial Galerna / Buenos Aires (アルゼンチン)
- ・ 初版：1977年
- ・ 再版／重版：情報ナシ
- ・ 底本：Arthur Waley, *The tale of Genji* (出版社・出版年は未記載)
- ・ 参考文献

Donald Keene, *La Literatura Japonesa*, Fondo de Cultura Económica, 1956

・ 翻訳範囲

「夕顔」巻のみである。空蟬との場面を除いた翻訳となっている。最後は光源氏が口ずさんだ「正に長き夜」の元である、『白氏文集』

卷 19 律詩「聞夜帖（夜砧を聞く）」の3・4句「八月九月正長き
夜 千聲万聲了る時無し」²を翻訳した文で終わっている。

・ 卷名の表記

タイトルと同じく、「La fugitiva de Chujo」である。卷名の「夕顔」をそのまま訳したものではない。「fugitiva」は「逃亡する・はかない・つかの間の」という意味である。このことについて、「夕顔」の原文が「御忍び歩きの頃」で始まることから、御忍び歩きの光源氏と夕顔とははかない逢瀬を示す題名にも通じる³との指摘もある。

・ 備考

本文の前に、翻訳者自身による解説「Una Historia de Genji」（『源氏物語』の歴史）があり、紫式部や『古事記』・『万葉集』など日本文学の説明がされている。またドナルド・キーン(Donald Keene)や、長編小説『失われた時を求めて』の作者であるマルセル・ブルースト(Marcel Proust)と比較した、メキシコの詩人オクタビオ・パス(Octavio Paz)の書評が掲載されている。叢書 Colecció Aves del Arca の1冊である。

(2) Genji Monogatari (Romance de Genji)

- ・ 翻訳者：フェルナンド・グティエレス (Fernando Gutiérrez)
- ・ 出版社／出版地：Editorial Juventud、Hesperus Lunas / Barcelona (スペイン)、Torre de Viento / Palma de Mallorca (スペイン)
- ・ 初版：1941年
- ・ 再版／重版：1992年 (Torre de Viento 版・Hesperus Lunas 版)、1993年 (Hesperus 版)、1998年 (Hesperus Lunas 版)、2000年 (1992年の再版・Torre de Viento 版)、2001年 (Torre de Viento 版・ペーパーバック)、2002年 (1992年の3版・Torre de Viento 版)、

2 岡村繁編『新釈漢文大系 第100巻 白氏文集 4』p.318 明治書院、1990年

3 菅原郁子「7 La fugitiva de Chujo」(伊藤鉄也編『スペイン語圏における日本文学』p.14 非売品、2004年9月)

2004年（Torre de Viento 版・ペーパーバック）、2005年（Torre de Viento 版）

- ・底本：Arthur Waley, The tale of Genji, G. Allen & Unwin, 1925～193である。YAMATA KIKOU（山田キク）のフランス語訳である、LE ROMAN DE GENJI, Flon, 1928にも影響を受けた。
- ・参考文献：記載ナシ
- ・翻訳範囲：底本の範囲に合わせた、「桐壺」～「葵」の巻までの訳である。
- ・巻名の表記：「KIRITSUBO」のようにローマ字表記である。ただし、「紅葉賀」と「花宴」は、それぞれ「KOYO-SETSU」・「LA FIESTA DE LAS FLORES」となっている。
- ・備考：編集・発行はいずれも JOSE J. DE OLAÑETA, EDITOR である。

(3) La novela de Genji

- ・翻訳者：ゲザビエ・ロカ・フェレール（Xavier Roca-Ferrer）
- ・出版社／出版地：Destino / BARCELONA（スペイン）
- ・刊行年月日：2005～2006年
- ・巻名の特徴：「Kiritsubo」のようにローマ字表記である。
- ・底本：不明
- ・参考文献：記載ナシ
- ・翻訳の範囲：完訳
- ・備考

アメリカの哲学者・文学批評家である、ハロルド・ブルーム（Harold Bloom）による序文と、翻訳者自身による、「世界文学の中での位置づけ」と「他国の文明と平安時代との比較」などの解説も掲載されている。

(4) LA HISTORIA DE GENJI

- ・翻訳者：ホルディ・フィブラ（Jordi Fibla）
- ・出版社／出版地：ATARANTA / GIRONA（スペイン）
- ・初版：2005年～2006年

- ・再版／重版：情報ナシ
- ・底本：Royall Tyler The Tale of Genji (Viking、2001年)
- ・参考文献

Arthur Waley, The tale of Genji (出版社・出版年未記載)、Edward G. Seindensticker, The tale of Genji (出版社・出版年未記載)

- ・翻訳範囲：完訳(「桐壺」巻～「夢浮橋」巻)
- ・巻名の表記

「Kiritsubo」のようにローマ字で書かれた題目の下に、「El pabellón de la paulonia」のようにスペイン語での題目が書かれている。題目の下には巻の名前の意味と、あらすじが書かれている。これは底本であるタイラー訳が、「KIRITSUBO / The Paulownia Pavilion」のように、ローマ字表記の下に英語での題目をつける形式になっており、それにならったためと思われる。本文に入る前に、その巻の登場人物について説明する形式も底本にあわせている。

(5) EL RELATO DE GENJI

- ・翻訳者：ヒロコ・イズミ・シモノ／下野泉 (HIROKO IZUMI SIMONO)、イヴァン・アウグスト・ピント・ロマン (IVAN AUGUSTO PINTO ROMAN)
- ・出版社：ペルー日系人協会 (APJ) / Cusco (ペルー)
- ・初版：2013年
- ・再版／重版：記載ナシ
- ・底本：阿部秋生、秋山虔、今井源衛 校注・訳『日本古典文学全集 源氏物語 1～3』(小学館、1970～1972年)。なお底本については、与謝野晶子『角川文庫 全訳源氏物語』(角川書店、刊行年は未記載)を使ったとの情報もある⁴。

4 zesal「スペイン語訳「源氏物語」ご紹介」(在日ペルー大使館 2014年2月7日の記事) <http://embajadadelperuenjapon.org/ja/> スペイン語訳「源氏物語」ご紹介 / (2014年11月4日閲覧)

- ・参考文献：記載ナシ
- ・翻訳範囲：第1巻は「桐壺」～「篝火」。第2巻は「野分」～「夢浮橋」までの完訳になる予定である。
- ・巻名の表記
「Kiritsubo」のようなローマ字表記の下に、「La cámara de la paulonia」という巻名をスペイン語で訳した題名がついている。
- ・備考
日本ペルー国交樹立140周年記念として、出版された本である。序章は下野氏の「源氏物語—世界初の女性の女性による女性の為の哲学書」、終章はピント氏の「紫式部と『源氏物語』」である。また本文の前に、諏訪春雄氏の「『源氏物語』のテキストと挿絵」と藤原克美氏の「『源氏物語』に描かれた愛」という、『源氏物語』の紹介に関する論文が掲載されている。

(6) スペイン語新訳『源氏物語』

- ・翻訳者：アリエル・スティラーマン (Ariel Stilerman)
- ・翻訳の公開
書籍として刊行されておらず、翻訳者の個人HPから公開している。
「Genji en español La historia de Genji en traducción」⁵
- ・公開年：2013年
- ・底本：早稲田大学の陣野秀則氏が編集された本文。具体的な書名は不明である。
- ・参考文献：記載ナシ
- ・翻訳範囲：「桐壺」巻のみ。
- ・巻名の表記
「El Patio de las Paulonias」というように巻名をスペイン語で訳している。その下に、「Capítulo primero de La historia de

5 Ariel Stilerman 「Genji en español La historia de Genji en traducción」
<http://genjienespanol.files.wordpress.com/2013/08/el-patio-de-las-paulonias-kiritsubo.pdf> (2014年11月4日閲覧)

Genji(Genjimonogatari) (『源氏物語』の第1章) という章題がついている。

・備考

なお、この翻訳に関して、「スペイン語新訳『源氏物語』を聴く一受容・翻訳・パフォーマンス」と題して、2013年7月23日に早稲田大学でワークショップが開催された。

◆2. 翻訳の全般的な特徴

(1) La fugitiva de Chujo

本文は、底本である The tale of Genji と同じ箇所注を入れており、底本に忠実な翻訳となっている。人名はローマ字表記であり、和歌は斜字体となっている。また「南無当来導師」のように、スペイン語に翻訳することが困難な箇所は、そのままローマ字表記としてある。

〈1〉スペイン語本文

“Namu torai no Doshi”, “Gloria al Salvador que vendra”. (p.59)

〈2〉日本語訳し戻し

「南無当来導師」、「来るべき救世主に栄光あれ」(訳：本稿執筆者)

(2) Genji Monogatari (Romance de Genji)

本文は底本に忠実である。主語がない箇所は、主語を補っている。脚注は底本を継承しつつ、翻訳者が追加したものもある。主に登場人物の官位や和歌の出典などである。また和歌は、底本で斜字体になっているものの、こちらでは普通の書体になっている。3行書きまたは4行書きの形式である。しかし例外もあり、「桐壺」巻で桐壺更衣が桐壺帝に向けて読んだ和歌である、「かぎりとして別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり」は以下のように会話文で処理をされている。

〈1〉スペイン語本文

Esta fin deseado ha venido ya, y porque me voy sola, ¡con qué alegría no hubiera yo vivido ! . . . (p.14, 2004年版)

〈2〉日本語訳し戻し

「この望まれた結末は既に来てしまい、私は一人で行ってしまうので、私が生きてこなければどのくらい嬉しかったですか…。」（訳：濱口謙司）

（3）La novela de Genji

スペイン語で初の完訳である。欧米で出版された、複数の言語の翻訳が混ざって利用されている。そのため、どのような底本が使われたのかは不明である。段落の順番なども翻訳者が自由に変更し、和歌は分かち書きをしている。例として、（2）と同じ場面で詠まれた「かぎりとして別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり」をあげる。

〈1〉スペイン語本文

Te dejo porque me toca
seguir el camino de todos.
Si tuviera elección,
no sería éste el camino elegido. (p.87)

〈2〉日本語訳し戻し

あなたとはお別れです。
なぜなら皆の道を追う番が私に回ってきたんです。
もし選べるのであれば、
選ばれた道はこれにはならないでしょうに。（訳：濱口謙司）

（4）LA HISTORIA DE GENJI

底本に忠実であり、注釈も詳しい。主語がない個所は、主語を補っている。和歌も底本にあわせて2行書きをしている。例として、（3）と同じ場面で詠まれた「かぎりとして別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり」をあげる。

〈1〉スペイン語本文

Ahora ha llegado el fin, y me llena de pena que debemos separarnos:
el camino que preferiría seguir es el que conduce a la vida. (p.40)

〈2〉日本語訳し戻し

今終わりが来て、私たちが別れなければならないのを悲しく思います。

続けて進むのに好ましい道は命につながる道です。(訳：濱口謙司)

〈3〉底本

“Now the end has come, and I am filled with sorrow that our ways must part:

the path I would rather take is the one that leads to life. ([3]p.5)

〈4〉底本の日本語訳

今、その終わりが来てしまい、そして私たちの道が分かれなければならないと思うと、私は悲しみでいっぱいになります。

私がむしろとりたい道は、生きることへつながる道なのです。(訳：本稿執筆者)

(5) EL RELATO DE GENJI

スペイン語では初の古典からの翻訳である。翻訳本文は『源氏物語』の本文（大島本）に忠実である。本文中の和歌も 5-7-5-7-7 の形式を意識して訳されている。以下に（4）と同じ場面で詠まれた、「かぎりとして別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり」をあげる。

〈1〉スペイン語本文

Nuestras rutas ahora
para siempre se apartan,
cuando en mi angustia
hubiese bien deseado
seguir la de la vida. (p.37)

〈2〉日本語訳し戻し（母語話者）

それぞれの道いま
永遠に別れていく
苦痛ながら
なにより進みたく

命の先へ（訳：テレサ・マルティネス・フェルナンデス）

〈3〉日本語訳し戻し（非母語話者）

私たちの道は今永遠に離れているのです。

苦しみの中で人生の道が続けたいと望んだとしても。（訳：濱口謙司）

また、本文と作品の時代背景を理解する助けとして、約 600 もの注釈がつけられている。

（6）スペイン語新訳『源氏物語』

翻訳者が運営する HP の記事によると、翻訳に際して以下の工夫をしたとしている⁶。

- 1) 古典の原文をできるだけ忠実に翻訳した。
- 2) 原文になく、翻訳者が補足をした箇所は灰色で示した。
- 3) 原文における一文が長くても、スペイン語で複数に分けて翻訳することを避けた。
- 4) 原文で同じ表現が登場したときは、スペイン語もそれにあわせて翻訳した。
- 5) 物語作品が女房によって朗読された可能性を考えて、朗読に適した文体等に調整した。
- 6) 主語が置かれていない文章は、そのまま翻訳した。
- 7) 動詞や形容詞の活用形により、主語を推測できるように工夫した。
主語を補う必要がある場合は、その箇所を灰色で示した。

このうち 1) と 5) の項目について、冒頭の文章を例としてあげてみる。

6 Ariel Stilerman「Genji en español La historia de Genji en traducción」(2014 年 11 月 5 日閲覧) <http://genjienespanol.wordpress.com/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E/>

〈1〉 スペイン語本文

¿Durante cuál reino...? Entre las muchas Consortes y Conían a <Su Majestad ,habia una que>recibía un trato preferencial para su rango.

Las damas que desde el principio pensaban orgullosas “seré yo”, escandalizadas, la desdeñaban y le tennían celos. (p.1)

〈2〉 日本語訳し戻し

どの治世の間だっただろう…？ 陛下に仕えていた多くの配偶者や内縁の妻の間に、位の割にはひいきめで大げさな扱いを受けていた人がいた。

最初から「私でしょう」と誇り高く思っていた貴婦人たちも、憤慨し、彼女を軽蔑して嫉妬していた。彼女の同じ位あるいは下位の愛人たちはよりいっそう多くのねたみを感じていた。(訳：濱口謙司)

まず 1) について、引用した本文のうち、〈 〉 でくくられた箇所は、データ上は灰色になっている。「Su Majestad ,habia una que」は「陛下にはあった（に仕えていた）」となり、それに続く「多くの配偶者や内縁の妻」が誰の配偶者や妻にあたり、彼女たちがどのような状況にあったかを補足している。

また 5) については、本文中の「“seré yo”」（「私でしょう」）に二重引用符をつけている。会話を意識した文章にすることで、「朗読された可能性を考えて、朗読に適した文体等に調整した」ことを反映していると思われる。

◆ 3. おわりに—今後の課題

スペイン語に翻訳された『源氏物語』は、想像以上に翻訳の種類がある。今年度はまず書誌を調査し、スペイン語本文—日本語訳し戻し—底本(判明している本のみ)を対応させた表を作成した。なお、2014年6月6日に開催された伊藤科研第3回研究会の席で、「スペイン語『源氏物語』

「桐壺」について」と題してこの表を使用して報告を行った。その際、「国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』事物索引」⁷にある7つの項目からいくつかの語を抽出し、訳し戻しを比較したことで全般的な翻訳の特徴をつかむことはできた。しかし時間の関係上、スペイン語に存在しない語をどのように翻訳したのか、他の言語から重訳された本については底本と本文の関係がどのようになっているかなど、検討しきれなかった感は否めない。より丁寧に、スペイン語の単語と日本語への訳し戻しデータをつきあわせていくという課題が残った。今後は古典に特有な語に焦点をあてて考察し、スペイン語訳を多言語翻訳の受容と研究の出発点としたい。

(国文学研究資料館 研究員)

7 「国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』事物索引」(国文学研究資料館編『源氏物語 千年のかがやき』p.156～167 思文閣出版、2008年)

執筆者一覧 (敬称略・掲載順)

伊藤 鉄也

(国文学研究資料館・教授)

ゲルガナ イワノワ

(シンシナティ大学・准教授)

緑川 眞知子

(早稲田大学・非常勤講師)

川内 有子

(立命館大学・大学院博士後期課程 1 回生)

海野 圭介

(国文学研究資料館・准教授)

李 美淑

(S E O U L 大学校人文学研究院・HK 研究教授)

浅川 槇子

(国文学研究資料館・研究員)

◆ 編集後記

科研の論文集を HP で公開するという斬新な試みを始めて、はや 4 ヶ月が経ちました。

今号も前号に引き続き、論稿の題材となった対象言語が多彩だけでなく、多角的な視点から考察した原稿が集まったと思います。公用語としては世界第 1 位の話者を持つ英語（母語話者：約 5 億 1,000 万人）、近年ブームになった韓国語（母語話者：約 7,500 万人）、国連公用語の 1 つであるスペイン語（母語話者：約 4 億 2,000 万人）という大陸を跨いだ言語の陣容を見ると、改めて平安文学研究の裾野の広さを感じます。

ご多忙の中、原稿をお寄せくださった方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。第 3 号もよろしくお願い致します。

（浅川慎子）

1 号に続き、『海外平安文学研究ジャーナル』2 号も無事発行することができました。執筆者ならびに関係者の皆様に感謝いたします。

本ジャーナルは、科研サイトよりダウンロードするという形を取っているため、公開後も継続的な周知も重要と考えています。より多くの研究者、関連分野の方々に活用していただけるよう活動情報をお知らせするとともに、ユーザビリティを高め、利用者数を増やしていきたいと思っています。

ジャーナルのほか、サイトの機能やユーザーインターフェイスについてなど、ご要望・改善点などお気づきの点がありましたら、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

（加々良恵子）

研究組織

研究代表者

伊藤 鉄也（国文学研究資料館・教授）

研究分担者

海野 圭介（国文学研究資料館・准教授）

野本 忠司（国文学研究資料館・准教授）

連携研究者

マイケル, ワトソン（明治学院大学・教授）

清水 婦久子（帝塚山大学・教授）

荒木 浩（国際日本文化研究センター・教授）

ラリー, ウォーカー（京都府立大学・准教授）

藤井 由紀子（清泉女子大学・准教授）

高田 智和（国立国語研究所・准教授）

研究協力者

高木 香世子（マドリード・アウトノマ大学・准教授）

緑川 眞知子（早稲田大学・講師）

須藤 圭（立命館大学・助教）

川内 有子（立命館大学・大学院生）

テレサ, マルティネス（立命館大学衣笠総合研究機構・客員研究員）

庄 捷淳（立命館大学・大学院生）

阿部 江美子（国文学研究資料館・研究員）

浅川 槇子（国文学研究資料館・研究員）

加々良 恵子（国文学研究資料館・補佐員）

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 2013 年度研究報告書
「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」
課題番号 [25244012] 研究代表者 伊藤 鉄也

海外平安文学研究ジャーナル 2.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.2.0

2015 年 03 月 11 日 発行

〈非売品〉

発行所 人間文化研究機構 国文学研究資料館

〒 190-0014 東京都立川市緑町 10-3

電話 050-5533-2900

<http://www.nijl.ac.jp/>

編集兼発行者 国文学研究資料館 伊藤鉄也

<http://genjiito.org/>

(「海外平安文学研究ジャーナル」 <http://genjiito.org/journals/>)

I S S N 2 1 8 8 - 8 0 3 5

© 伊藤鉄也

本書を無断で複写・複製・転載することは
法律で認められた場合を除き禁じられています。